

梅毒の経過に対するペニシリンの臨床的 並に実験的研究

(第 1 編)

各期梅毒に対するペニシリンの臨床的研究

岡山大学医学部皮膚科泌尿器科教室 (主任：根岸教授)

副 手 森 岡 祐 治

(昭和 29 年 9 月 5 日受稿)

目 次

第 1 章 緒 論	第 1 項 体重との関係
第 2 章 実験成績	第 2 項 尿性及び尿量との関係
第 3 章 皮疹に及ぼす影響	第 3 項 ペニシリン治療期間中の肝機能 について
第 4 章 血清反応に及ぼす影響	第 4 項 その他全身に及ぼす影響
第 1 項 血清反応の消長	第 6 章 総括及び考按
第 2 項 用量と血清反応の関係	第 7 章 結 論
第 3 項 使用法と血清反応の関係	文 献
第 4 項 副 作 用	
第 5 章 全身状態に及ぼす影響	

第 1 章 緒 論

Fleming により 1929 年、ペニシリンが発見されて諸種の疾患に応用されるに至つた。これが梅毒に試用されたのは、1943 年 10 月で、Machoney, Arnold¹⁾等はこれを初期梅毒に使用した結果、局所のスピロヘータが速かに消失するのを認め、その駆梅効果の著大なることを発表して以来、Wright⁸⁾はペニシリンの単一ないし 3 回注射による早期梅毒の治効を発表し、Plotke⁹⁾¹¹⁾, Castello¹⁰⁾, Chargin¹²⁾¹³⁾等も早期梅毒に対するペニシリン、砒素及び蒼鉛剤の併用による効果を報告し、わが国においても北村(包)¹⁴⁾、はじめ樋口²⁾、川村³⁾、重松⁴⁾、並木⁶⁾⁷⁾、竹内⁵⁾³⁸⁾等がペニシリンによる駆梅成績を主として臨床的に報告し、各国において大規模な統計的観察があいついで行われている。その間治療術式も種々変遷を経ているが、未だ決定的な段階に達してはいない。わが国においてもペニシリン駆梅療法が漸く普及しようとしているが、しかしまだ

最も効果的な使用法、用量あるいは一時的に血清反応の陰性化が認められても、その後の遠隔成績、かつまたペニシリンの全身状態に及ぼす影響などについて検討すべき点が多々ある。

いまわたくしは昭和 24 年より同 29 年まで 6 年間に当教室及び岡山県立岡山病院を訪れた各期梅毒患者 75 名に、ペニシリン療法を施行し、各期梅毒に対するペニシリンの影響を検討し、これ等の関係を明らかにしようと試みた。

第 2 章 実験成績

実験材料として岡山大学医学部皮膚科泌尿器科教室及び岡山県立岡山病院を訪れた、各期梅毒患者 75 名、すなわち第 1 期 9 例、第 2 期顕症 4 例、第 2 期潜伏 10 例、第 3 期潜伏 44 例、護謨腫 2 例、前立腺梅毒 1 例、脊髓癆 2 例、梅毒性脊髓炎 1 例、先天梅毒 2 例で、これにペニシリン 30 万ないし 60 万単位を 1 日 1 回または 1 日 2 ないし 6 回分注法によつ

て、平均 10 ないし 20 日間時にそれ以上、連続注射して、総量最低 150 万単位より最高 2100 万単位を使用した。梅毒血清反応は補体結合反応として、Wassermann 反応原法、沈降反応として、村田及び Kahn 反応（以下 WaR、村田、Kahn と略記する。）及び少数例には凝集法、スライド法を治療前、中、及び治療後定期的に行つた。

第 1 期 梅毒

第 1 例 柴○昇 25 才男 機関工 初診昭和 26 年 6 月 29 日 蚕蝕性硬性下疳

現症 5/V 感染機会、8/VI 冠状溝に無痛性潰瘍を発生。冠状溝左側に大豆大、1 個の不規則な潰瘍があり、底部はかなり硬く圧してもさほどの疼痛はない、周囲は壊死性著色を示す。下疳表面より粘液性の僅かな分泌物を認めるもスピロヘータ（以下ス. と略記）の証明はできなかつた。WaR+, 村田卅, Kahn卅。

治療及び経過。水性プロカインペニシリン G（以下水. ペG. と略記。）60 万単位 1 日 1 回筋注、総量 630 万単位使用。60 万単位にして周囲の壊死性変化軽快。300 万単位で潰瘍の肉芽形成良好となるも、WaR 卅、村田卅、Kahn卅。570 万単位にて上皮形成を認め、630 万単位終了時においては WaR-, 村田+, Kahn卅、となり、潰瘍は治癒した。治療後 13 日にして硬結は軟化し、血清反応は WaR-, 村田±, Kahn卅、19 日後 WaR-, 村田±, Kahn卅、44 日後 WaR-, 村田-, Kahn-, その後 80 日、112 日、170 日、195 日後の検査はいずれも陰性。ペニシリン治療期間中に体重 0.7kg 減少を認めた。

第 2 例 中○菊○ 22 才男 農業 初診昭和 25 年 3 月 14 日 初期梅毒

現症 20/I 感染機会後約 1 週間にて冠状溝繫帯部に無痛性潰瘍生じ、放置するに硬結を残して治癒した。冠状溝に扁豆大の癰痕を認め硬度や弾力硬で、鼠蹊淋巴腺両側共に 2、3 個の豌豆大の腫脹、頸部、項部、腋窩部にも 1、2 個の豌豆大の淋巴腺腫脹を認め

た。WaR卅、村田卅、Kahn卅。

治療及び経過。結晶ペニシリン G カリウム塩（以下結ペカ. と略記す。）60 万単位 1 日 4 回分注、総量 600 万単位使用。600 万単位終了時 WaR+, 村田卅、Kahn卅となり、淋巴腺腫脹は鼠蹊部に 2、3 個の僅かの腫脹を認めるのみとなつた。9 日後 WaR-, 村田卅、Kahn卅、14 日後 WaR-, 村田卅、Kahn卅、35 日後 WaR-, 村田-, Kahn卅、47 日後 WaR-, 村田+, Kahn+, 60 日後 WaR-, 村田-, Kahn-, となり、その後 72 日、83 日、116 日、198 日後に検査を行うもいずれも陰性。ペ. 治療中体重は 1.0kg 減少を認めた。

第 3 例 中○直○ 37 才男 工員 初診昭和 25 年 10 月 11 日 蚕蝕性硬性下疳

現症 1ヶ月前冠状溝の小潰瘍に気付く、次第に増大、鳩卵大となる。顎下腺両側各々 1 個、腕豆大、腋窩部各 1 個、扁豆大、鼠蹊部左側 1 個鳩卵大、右側 1 個腕豆大、いずれも弾力性硬。陰茎浮腫状に腫脹、冠状溝に指頭大の潰瘍を認め、硬度硬く、分泌物少く、上縁は壊死性。分泌物よりス. を証明する。WaR卅、村田卅、Kahn卅。

治療及び経過。水ペG. 60 万単位 1 日 2 回分注、総量 600 万単位使用。60 万単位後ス. は消失、90 万単位後壊死性組織自然に剝離、肉芽良好となる。150 万単位後 WaR 卅、村田卅、Kahn卅、300 万単位で WaR 卅、村田卅、Kahn卅 で淋巴腺腫脹消失し、左側鼠蹊腺の腫脹を残すのみとなり、潰瘍部の肉芽形成著明となる。450 万単位注射後に腰部、臀部に麻痺大ないし留針頭大の痒痒性紅色丘疹を生じ、次第に胸部、背部に拡つた。丘疹はペ. 注射終了と共に消褪した。600 万単位終了時 WaR 卅、村田卅、Kahn卅、7 日後鼠蹊淋巴腺腫脹は半分の大きさとなり、9 日後 WaR+, 村田卅、Kahn卅、11 日後潰瘍は癰痕治癒。21 日後 WaR±, 村田卅、Kahn卅、46 日後 WaR-, 村田±, Kahn+, 73 日後 WaR-, 村田-, Kahn+, となつた。ペ. 療法中体重は 1.0kg の減少を認めた。

第 4 例 三○増○ 29 才男 農業 初診昭和

和26年4月23日 硬性下疳

現症 10/Ⅲ 感染機会、約6日前より冠状溝に米粒大の無痛性潰瘍に気付く。冠状溝繫帯部に近く豌豆大円形の潰瘍を認め、周囲はやゝ堤防状に隆起し、周囲、底部に著明な硬結を認む、圧痛はない。鼠蹊腺は両側共に数個扁豆大。ス。は僅かに証明された。WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺

治療及び経過 水ペ G. 60万単位1日2回分注、総量600万単位。60万単位後ス。は証明出来ない。300万単位で WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、潰瘍やゝ縮小、肉芽良好。510万単位で WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、570万単位で WaR[±]、村田⁺、Kahn⁺、6日後 WaR⁻、村田[±]、Kahn⁺、13日後潰瘍癒合。30日後 WaR⁻、村田[±]、Kahn⁺。べ。療法中体重は1.56kg 減少し、540万終了時に全身倦怠感を認めたが、570万単位終了と共に消褪した。

第5例 三〇幸〇郎 47才男 商業 初診昭和25年10月26日 硬性下疳

現症 8月末感染機会、4週間前より冠状溝に発赤、10日前より潰瘍形成。冠状溝に豌豆大円形の潰瘍1個、周縁及び底部は硬く、圧痛はない。潰瘍面は比較的清潔にして分泌物少く、多数のス。を証明。WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。

治療及び経過 水ペG. 30万1日1回筋注、総量300万単位。ス。は30万単位後はまだ証明されたが、60万単位後消失、下疳は4日目より軟化乾燥、第8日目すなわち210万単位後癒合。血清反応は150万単位で WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、300万単位終了時 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、治療後17日、60日後の検査はいずれも陰性。べ。治療期間中体重は0.2kg 減少を認めた。

第6例 高〇浅〇 19才男 鉄道員 初診昭和25年10月31日 硬性下疳

現症 1/X 感染機会、約1週間前より包皮縁に小豆大の無痛性の潰瘍1個、底部はかなり硬く圧しても疼痛は殆んどなく、表面より膿液性の分泌物を僅かに認め、ス。を証明した。

両鼠蹊淋巴腺2、3個づつ扁豆大に腫脹、硬度硬く圧痛はない。WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。

治療及び経過 水ペ。G. 30万1日1回筋注、総量300万単位。30万単位後ス。は消失、3日目に潰瘍著明に縮小、5日目に治癒。血清反応は150万単位で WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、240万単位で WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、300万単位終了時に WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、3日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、27日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。副作用は認められない。

第7例 難〇忠〇 16才男 事務員 初診昭和29年6月17日 混合下疳

現症。約6週間前感染機会、1週間後冠状溝に軽度の疼痛を有する潰瘍発生、10日前より右鼠蹊淋巴腺、半有痛性の腫脹を認めた。冠状溝に示指頭大の潰瘍を認め、周辺に褐色の痂皮を有し、潰瘍の底部に硬い浸潤をふれる、分泌物よりス。を証明。右鼠蹊淋巴腺鳩卵大に腫脹しやゝ圧痛を認める。WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。

治療及び経過 水ペG. 60万1日1回筋注、総量780万単位、60万単位にて周辺の痂皮は剝離、潰瘍の肉芽良好となり、60万単位でス。は消失。240万単位で潰瘍著明に縮小、淋巴腺腫脹約 $\frac{1}{2}$ となり圧痛消失。600万単位で潰瘍癒合。硬結消失。780万単位終了時凝集法⁻、スライド法⁻、其の後10日、23日、31日、55日、86日、123日といずれも陰性。副作用はなんら認むべきものはなかつた。

第8例 勢〇源〇 17才男 無職 初診昭和28年10月14日 硬性下疳

現症。20/Ⅸ 感染機会、3/X 包皮外板背面に豌豆大、不規則な潰瘍1個、硬度やゝ硬く、圧痛を欠ぐ。表面の分泌物よりス。を証明。WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。

治療及び経過 油性プロカインペニシリン G (以下油ペG. と略記) 60万1日1回筋注、総量600万単位。第2日注射前にはス。は証明できなかつた。120万単位にて潰瘍肉芽面著明に良好となり、300万単位で治癒し、硬結は注射後9日目に軟化消失。600万単位終

了時 WaR-, 村田-, Kahn-, その後12日, 50日, 70日, 90日, 120日, 150日, 205日後の検査いずれも陰性. 副作用はなんら認めない.

第9例 石○好○ 20才男 会社員 初診
昭和28年2月3日 硬性下疳

現症 約2ヶ月前感染機会, 4週間後に冠状溝繫帯部に近く不規則な小豆大の潰瘍を認め, かなりの硬度を有し, 圧痛は殆んど認められない. 凝集法+, スライド法+.

治療及び経過 油ベG. 60万1日1回筋注, 総量600万単位, 90万単位で潰瘍軟化乾燥, 480万単位で潰瘍著明に縮小, 凝集法+, スライド法+, 600万単位終了時に潰瘍治癒, 凝集法-, スライド法-, その後20日, 40日, 65日, 83日, 102日後の検査はいずれも陰性. 副作用は全く認められなかつた.

第2期顕症梅毒

第10例 堀○達○郎 23才男 公吏 初診
昭和25年9月27日 梅毒性薔薇疹, 丘疹

現症 感染機会不明, 約2週間前飲酒後2, 3日で前膊に暗赤色の紅斑生じ, 昨日よりほとんど全身に拡つた. 掻痒感はない. 最近後頭部に頭痛がある. 顔面, 下肢を除き軀幹, 上肢に扁豆大薔薇色の円形または楕円形の紅斑があり, 前膊に米粒大の銅紅色の丘疹を認め, 硬度はやゝ硬い. 鼠蹊部, 腋窩部, 頸部に2, 3個づゝ淋巴腺の腫脹があり, WaR+, 村田+, Kahn+.

治療及び経過 水ベG. 30万1日1回筋注, 総量150万単位. 60万単位で紅斑著明に褪色, 90万単位で丘疹も次第に吸収, 150万単位終了後これらの皮疹は消失. 60万単位でWaR+, 村田+, Kahn+, 150万単位終了時 WaR+, 村田+, Kahn+. べ. 治療期間中副作用は全くなく, 体重3.2kg 増加を認めた.

第11例 長○菊○ 32才女 農業 初診
昭和25年10月27日 扁平コンジローム

現症 感染時期不明. 約2週間前より大陰唇部湿潤, 軽度の灼熱感を認めたが放置. 浮腫状に腫脹して来たので来院. 左大陰唇鶏卵大に腫脹, 両小陰唇も腫脹, 右大陰唇に数個の豌豆大扁平な丘疹があり, 表面湿潤し分泌

物よりス. を証明する. WaR+, 村田+, Kahn+.

治療及び経過 水ベG. 60万1日2回分注. 総量630万単位. 90万単位で大小陰唇の腫脹ほとんど消褪, 丘疹表面乾燥, 210万単位で丘疹ほとんど消褪僅かに硬結を残すのみとなつた. 450万単位で硬結消失, 血清反応は210万単位でWaR+, 村田+, Kahn+, 630万単位終了時 WaR+, 村田+, Kahn+, 23日後 WaR-, 村田+, Kahn+, 副作用は認められない.

第12例 中○直○ 37才男 工員 初診
昭和25年10月13日 梅毒性丘疹

現症 硬性下疳にして治療中昨日より頬, 胸部, 上下肢に皮疹を生じた. 掻痒感, 疼痛は全くない. 頬, 胸部, 肩胛部, 上膊, 大腿部に播種状に大豆大銅紅色の丘疹を認め, WaR+, 村田+, Kahn+.

治療及び経過 水ベG. 60万1日2回分注, 総量600万単位. 180万単位で四肢の丘疹褪色, 270万単位で顔面の丘疹, 色調共に消失. 450万単位で WaR+, 村田+, Kahn+, 600万単位終了時に WaR+, 村田+, Kahn+, 9日後 WaR+, 村田+, Kahn+, 21日後 WaR+, 村田+, Kahn+, 46日後 WaR-, 村田+, Kahn+, 73日後 WaR-, 村田-, Kahn+. 体重は1.0kg 減少した.

第13例 山○八○ 29才女 無職 初診
昭和27年2月12日 梅毒性丘疹

現症 感染期不明, 昭和26年12月より胸部に豌豆大の紅斑生じ, 次第に胸部, 背部に拡つた. 掻痒感は一切ない. 項部, 前胸部, 上背部に播種状, 1/2爪甲大, 銅紅色の丘疹あり. 硬度やゝ硬, 項部, 顎下部, 腋窩部, 鼠蹊部に多数の淋巴腺腫脹を認める. WaR+, 村田+, Kahn+.

治療及び経過 水ベG. 60万1日2回分注, 総量600万単位, 150万単位で丘疹の色調やゝ消褪, 300万単位で丘疹著明に扁平化, 色調著明に消褪, 360万単位でほとんど消失, 600万単位終了時に完全に消失. 血清反応は180万単位で WaR+, 村田+, Kahn+, 420

万単位で WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 600 万単位終了時 WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 3 日, 25 日後いずれも WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 43 日後に WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, となり, 78 日後 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 126 日後 WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $+$, 145 日後 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $+$, 187 日後 WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $\pm$, 204 日後 WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $+$, 229 日後 WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $\pm$, その後 254 日, 295 日といずれも陰性。べ。治療中体重は 1.5kg 減少した。

第 2 期潜伏梅毒

第 14 例 岡 ○真 23 才男 無職 初診昭和 25 年 2 月 6 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昭和 23 年 4 月頃硬性下疳に罹患し放置。頸部, 腋窩部, 鼠蹊部に扁豆大の淋巴腺腫脹を認める。WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。

べ。療法迄の治療 クロロアセミン 0.86g, 次サリチル酸蒼鉛 (以下次サ蒼鉛と略記) 10 回注射するも, WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。

治療及び経過 結ベカ。60 万 1 日 4 回分注, 総量 600 万単位。360 万単位で WaR $+$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 600 万単位終了時 WaR $\pm$, 村田 $+$, Kahn $\pm$, 28 日後 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。副作用は全く認められなかつた。

第 15 例 浜 ○益 ○ 27 才女 無職 初診昭和 26 年 6 月 2 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 11/V 始めて血清反応陽性に気付く。腋窩部, 鼠蹊部に淋巴腺の無痛性腫脹を認め, WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。

べ。療法迄の治療 マハルセミン 0.28kg, 次サ蒼鉛 4 回注射するも WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。治療及び経過 複合水性ペニシリン

(以下複べ。と略記) 40 万 1 日 1 回筋注, 合計 240 万単位, 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 合計 390 万単位, 総量 630 万単位。160 万単位で WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 630 万単位終了時に WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 13 日後 WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 31 日後 WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 52 日後 WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。べ。注射後はマハルセミン 0.82g 併用。べ。療法中に体重 0.85kg 減少を認めた。

第 16 例 大 ○俊 ○ 26 才女 無職 初診昭和 27 年 12 月 13 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 夫が結婚前駆梅療法を受けたので, 昭和 24 年 12 月血清反応を行い陽性。サルバルサン療法を受けた。WaR $+$, 村田 $+$, Kahn $\pm$ 。

べ。療法迄の治療 サルバルサン (以下「サ」剤と略記) 0.36g にて, WaR $+$, 村田 $+$, Kahn $\pm$ 。

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 720 万単位。720 万単位終了時 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 6 日後 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。次いで昭和 28 年 1 月 31 日よりマリア発熱療法を行い, 3 月 3 日 WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。3/Ⅲより水ペ G. 60 万 1 日 2 回分注, 総量 990 万単位。210 万単位で WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 990 万単位終了時に WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 27 日, 44 日, 62 日, 83 日後といずれも WaR $-$, 村田 $+$, Kahn $+$, 122 日, 150 日後は WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $\pm$, 161 日後には WaR $-$, 村田 $-$, Kahn $-$, その後 173 日, 208 日といずれも陰性。第 2 回目のべ。療法中体重 1.4g 減少。

第 17 例 河 ○悦 ○ 26 才女 会社員 初診昭和 27 年 10 月 31 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 9 月集団検診で陽性を知り, サ剤 2.82g 注射。WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 2100 万単位。300 万単位で WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $+$, 600 万単位で WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$, 1200 万単位で WaR $\pm$, 村田 $+$, Kahn $+$, 1800 万単位で WaR $-$, 村田 $+$, Kahn $\pm$, 2100 万単位終了時 WaR $-$, 村田 $\pm$, Kahn $+$ 。体重は 300 万単位後 2.3kg 減少, 720 万単位で更に 0.1kg, 1200 万単位で更に 0.9kg, 1800 万単位後には治療前より 3.4kg の減少を認めた。

第 18 例 齊 ○嘉 ○ 22 才男 官吏 初診昭和 25 年 6 月 30 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昭和 23 年 5 月感染機会, 6 月下疳生じ, 来院迄にマハルゾール 14 回, 次サ鉛 7 回注射, 現在全身倦怠感を訴える。WaR $\pm$, 村田 $\pm$, Kahn $\pm$ 。

べ。療法迄の治療 クロロアーセミン 3.55g, 次サ蒼鉛 32 回注射, WaR-, 村田士, Kahn士。

治療及び経過 油べ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 630 万単位, 270 万単位で WaR-, 村田士, Kahn士, 630 万単位終了時 WaR-, 村田士, Kahn+, 11 日後 WaR-, 村田-, Kahn+, 25 日, 37 日後と WaR-, 村田-, Kahn+, 53 日後 WaR-, 村田-, Kahn-, 71 日, 330 日後 WaR-, 村田-, Kahn+。
べ注射後マハルセミン 1.37g, 次サ蒼鉛 6 回併用, べ療法中副作用は認められず, 体重は 0.5kg 増加した。なお 330 万単位後全身倦怠感消失した。

第 19 例 武○俊○ 24 才男 運転手 初診昭和 25 年 3 月 23 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昭和 22 年 8 月末亀頭部に潰瘍を認め, サ剤 8 回, マハルゾール 38 回注射, WaR士, 村田士, Kahn士。

治療及び経過 油べ G. 60 万 1 日 2 回分注, 総量 900 万単位, 240 万単位で WaR士, 村田士, Kahn士, 540 万単位で WaR士, 村田士, Kahn士, 12 日後 WaR士, 村田士, Kahn士, 注射終了後クロロアーセミン 0.3g 併用, べ療法中に体重 1.5kg 減少した。

第 20 例 神○栄 26 才女 無職 初診昭和 25 年 4 月 3 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昭和 23 年結婚, 同年 5 月血清反応陽性, サ剤 20 回注射。鼠蹊部に数個の淋巴腺腫脹を認め, WaR士, 村田士, Kahn士。

治療及び経過 水べ G. 30 万 1 日 2 回分注, 総量 600 万単位, 150 万単位で WaR士, 村田士, Kahn士, 300 万単位で WaR-, 村田士, Kahn士, 450 万単位で WaR士, 村田士, Kahn士, 600 万単位終了時 WaR士, 村田士, Kahn士。べ療法中 90 万単位で体重 0.6kg 減少したが, 10 回目には正常に復した。9 回目より注射後約 1 時間にて前頭部に頭痛を訴へ, 約 2 時間後消褪, べ療法後は頭痛は全く認められなかつた。

第 21 例 立○春○ 35 才男 事務員 初診昭和 24 年 5 月 7 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昨年 7 月末淋疾に罹患 梅毒には気付かない, WaR士, 村田士, Kahn士。

治療及び経過 油蠟ペニシリン 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位, 120 万単位で WaR士, 村田士, Kahn士, 300 万単位終了時 WaR+, 村田士, Kahn士, 51 日後 WaR士, 村田士, Kahn+。べ療法中に体重 0.3kg 減少した。

第 22 例 大○清○ 33 才男 会社員 初診昭和 27 年 4 月 3 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 昭和 26 年硬性下疳に罹患, 現在迄にマハルゾール 1.62g, ミノフェーゲン AL 11 回注射, WaR-, 村田-, Kahn+。

治療及び経過 水べ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 600 万単位, 150 万単位で WaR-, 村田-, Kahn+, 300 万単位で WaR-, 村田-, Kahn-, 600 万単位終了時 WaR-, 村田-, Kahn士。べ療法中副作用はなんら認めない。

第 23 例 森 ○子 24 才女 無職 初診昭和 27 年 9 月 14 日 第 2 期潜伏梅毒

現症 約 10 ヶ月前感染機会, 6 ヶ月後血清反応陽性, サ剤 10 回, マハルゾール 4 回, 次サ蒼鉛 7 回注射。鼠蹊淋巴腺両側共に 2, 3 個, 右腋窩腺 1 個扁豆大の腫脹を認め, 凝集法士, スライド法+。

治療及び経過 水べ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 600 万単位, 600 万単位終了時凝集法士, スライド法-, 11 日後凝集法士, スライド法+, 23 日後凝集法+, スライド法-, その後 35 日, 63 日, 91 日といずれも陰性。認むべき副作用はなかつた。べ注射後マハルセミン 1.45g, 次サ蒼鉛 12 回併用した。

第 3 期潜伏梅毒

第 24 例 鈴○義○ 46 才男 会社員 初診昭和 27 年 9 月 25 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 10 年前横痃切開, 半年前より後頭部の頭痛, 耳鳴ありて血清反応陽性と言われ, ペニシリン 1200 万単位注射。後頭部の頭痛, 耳鳴を認め, WaR+, 村田士, Kahn士。

べ療法迄の治療 9/X マラリア発熱療法を行うも, WaR+, 村田士, Kahn士。

治療及び経過 水べ G. 60 万 1 日 2 回分注, 総量 1560 万単位, 240 万単位で WaR-, 村田

卅, Kahn卅, 480万単位で WaR±, 村田卅, Kahn卅, 840万単位で WaR-, 村田-, Kahn±, 1200万単位で WaR±, 村田+, Kahn±, 1320万単位で WaR-, 村田±, Kahn+, 1560万単位終了時 WaR-, 村田卅, Kahn卅, 5日後 WaR-, 村田+, Kahn+, 11日後 WaR±, 村田±, Kahn±, 16日後 WaR-, 村田±, Kahn卅, 25日後 WaR-, 村田-, Kahn+, その後35日, 40日, 50日, 70日といずれも WaR-, 村田±, Kahn±. 頭痛, 耳鳴は300万単位後消褪, ペ. 療法中に体重2.7kg 減少した.

第25例 大○桂○ 22才女 農業 初診
昭和27年3月24日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和23年結婚後1ヶ月にて両側鼠蹊部淋巴腺無痛性腫脹を認めたが放置. 現在自覚症状はない. WaR卅, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 油ベG. 150万1日1回筋注. 総量750万単位. 750万単位終了時に WaR卅, 村田卅, Kahn卅. 副作用はなんら認めず, 体重も1.6kg 増加を認めた.

第26例 石○竹○ 33才男 農業 初診
昭和27年2月18日 第3期潜伏梅毒

現症 感染時期不明で自覚症状は全くない. WaR-, 村田卅, Kahn卅で淋巴腺腫脹は認めない.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン0.34g 注射するも WaR-, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 油ベ G. 30万1日1回筋注, 総量300万単位. 300万単位終了時 WaR-, 村田卅, Kahn卅, 14日後 WaR-, 村田卅, Kahn卅, 60日後 WaR-, 村田±, Kahn±. ペ療法中副作用はなんら認められなかつた.

第27例 大○津○郎 61才男 無職 初診
昭和26年12月9日 第3期潜伏梅毒

現症 約20年前肩凝り, 偏頭痛のため血清反応を行い, 陽性と言われサ剤7回注射. 現在左側偏頭痛, 左上膊より肩に及ぶ牽引痛あり, WaR卅, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 水ベG. 60万1日2回分注, 総量750万単位. 偏頭痛は90万単位後より次第に軽快, 330万単位にてほとんど消失,

630万単位で偏頭痛, 牽引痛は完全に消褪. 血清反応は300万単位で WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 750万単位終了時に WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 2日後 WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 9日後 WaR+, 村田卅, Kahn卅, 18日, 24日後 WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 34日, 38日後 WaR±, 村田卅, Kahn卅, 45日, 87日後 WaR-, 村田卅, Kahn卅, ペ. 終了後マハルセミン0.49g, ミノフェーゲンAL40回併用. ペ療法中体重0.2kg 減少し, 60万単位注射後約30分に注射部位と反対側に腰痛, 同時に胃重感を訴へ, 約3時間後に消失. 120万単位時に注射約20分後に右肩, 左下肢の牽引痛, 右腰部の鈍痛を訴へ, 約3時間後に消褪, 210万単位時にも同様の症状現われ約3時間後消褪した.

第28例 梁○永○ 45才男 労働者 初診
昭和26年11月30日 第3期潜伏梅毒

現症 約3年前腰痛のため内科へ入院中, 血清反応陽性と云われ, 本年3月より3ヶ月間サ剤17回注射. WaR卅, 村田卅, Kahn卅. ペ. 療法迄の治療 7/XIIより翌12/IIまでにマハルセミン0.96g注射. WaR+, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 水ベG 60万1日1回筋注, 総量600万単位. 300万単位で WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 600万単位終了時 WaR-, 村田+, Kahn卅, 11日後 WaR±, 村田+, Kahn卅, WaR-, 村田卅, Kahn卅, 29日後 WaR-, 村田卅, Kahn卅, 48日後に WaR卅, 村田卅, Kahn卅, ペ. 療法後にマハルセミン1.88g, ミノフェーゲンAL15回併用. ペ. 療法中体重は1.3kg減少し, 17日後に回復した.

第29例 渡○和○ 55才女 無職 初診
昭和25年1月4日 第3期潜伏梅毒

現症 約7ヶ月前血清反応陽性に始めて気付いた. WaR-, 村田卅, Kahn卅.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン3.53g, クロロアーセミン5.68g, 次サ蒼鉛15回, ミノフェーゲンAL64回注射. WaR-, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ベG. 30万1日1回筋注,

総量600万単位 330万単位でWaR-, 村田-, Kahn-, 600万単位終了時 WaR-, 村田-, Kahn-, 15日, 63日後の検査はいずれも陰性, 155日, 174日, 191日後はいずれもWaR-。村田-, Kahn+, その後205日, 226日, 261日, 316日, 378日, 466日, 564日, 663日といずれも陰性。なお63日までにマハルセミン0.72g併用したが, その後は全くの無治療で経過を観察した。ペ。療法中120万単位で体重1.2kg減少, 360万単位で正常に復した。

第30例 木○安○ 51才女 無職 初診
昭和25年8月21日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和24年12月血清反応陽性でマハルゾール25回注射。WaR+, 村田+, Kahn+。

ペ。療法迄の治療 21/VIIIより翌17/IVまでにマハルセミン1.5g, 次サ蒼鉛21回注射, WaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 複ペ。40万1日1回筋注, 総量600万単位。240万単位でWaR-, 村田+, Kahn+, 360万単位でWaR-, 村田+, Kahn+, 600万終了時WaR+, 村田+, Kahn+, 25日, 120日後といずれもWaR-, 村田+, Kahn+, 498日後WaR-, 村田+, Kahn+, 627日後WaR-, 村田+, Kahn+。ペ。注射後マハルセミン0.16g併用, ペ療法中体重1.3kg減少した。

第31例 大○育○ 28才男 農業 初診
昭和27年4月3日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和22年硬性下疳に罹患, サ剤約30回注射。WaR+, 村田+, Kahn+。

ペ。療法迄の治療 3/IVより20/Vまでにマハルセミン0.08g注射, WaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 油ペG 150万1日1回筋注, 総量750万単位。750万単位終了時 WaR+, 村田+, Kahn+, 副作用はなんら認められなかった。

第32例 多○久○ 50才女 無職 初診
昭和23年9月8日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和22年血清反応陽性に気づき, サ剤15回注射。全身症状に著変なく WaR+, 村田+, Kahn+。

ペ療法迄の治療 昭和23年9月8日より昭和26年6月19日までにマハルゾール2.1g, クロロアーセミン0.28g, 次サ蒼鉛18回, ミノフエーゲンAL36回注射, WaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 複ペ。40万1日1回筋注, 合計120万単位, 水ペG 30万1日1回筋注, 合計480万単位, 総量600万単位。330万単位でWaR+, 村田+, Kahn+, 600万単位終了時 WaR+, 村田+, Kahn+, 7日後 WaR-, 村田+, Kahn+。ペ。療法中体重1.0kg減少した。

第33例 阿○三○ 35才男 会社員 初診
昭和27年3月25日 第3期潜伏梅毒

現症 24才の時硬性下疳に罹患, サ剤3回注射。WaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 水ペG 60万1日1回筋注, 総量1020万単位。240万単位でWaR-, 村田+, Kahn+, 600万単位で WaR-, 村田+, Kahn+, 900万単位で WaR-, 村田+, Kahn+。1020万単位終了時 WaR-, 村田+, Kahn+。副作用はなんら認められなかった。

第34例 土○吟○ 46才男 会社員 初診
昭和27年1月28日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和23年3月保健所で血清反応陽性と言われ, 昭和26年6月までにサ剤24回, マハルゾール65回, ペ。1200万単位注射。WaR+, 村田+, Kahn+の外著変は認められない。

ペ。療法迄の治療 マラリア発熱療法を行いWaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 水ペG 60万1日2回分注, 総量1110万単位。300万単位でWaR-, 村田-, Kahn+, 600万単位で WaR-, 村田-, Kahn+, 1110万単位終了時WaR-, 村田+, Kahn+, 28日後WaR-, 村田+, Kahn+。副作用はなんら認められなかった。

第35例 青○二○ 53才男 工員 初診
昭和26年1月9日 第3期潜伏梅毒

現症 23才の時硬性下疳に罹患, サ剤を約三ヶ月間注射。WaR+, 村田+, Kahn+。

ペ。療法迄の治療 マハルセミン0.08注射, WaR+, 村田+, Kahn+。

治療及び経過 複べ. 40万1日1回筋注, 合計120万単位, 水べG. 30万1日1回筋注, 合計420万単位, 総量540万単位. 240万単位でWaR-, 村田±, Kahn+, 450万単位でWaR-, 村田±, Kahn+, 540万単位終了時にWaR-, 村田-, Kahn±, 23日後WaR-, 村田-, Kahn±, 32日後WaR-, 村田±, Kahn±. 副作用はなんら認めなかつた.

第36例 水○武○ 39才男 会社員 初診昭和24年6月4日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和18年第2期梅毒疹に罹患, サ剤約40回注射. WaR+, 村田卅, Kahn卅.

べ. 療法までの治療 昭和24年6月4日より昭和25年7月18日までにマハルゾール2.56g, クロロアーセミン2.54g, 次サ蒼鉛41回, ミノファーゲンAL47回注射, WaR+, 村田+, Kahn卅.

治療及び経過 水べG. 30万1日2回分注, 総量330万単位. 120万単位でWaR±, 村田卅, Kahn卅, 330万単位終了時WaR-, 村田+, Kahn卅, 40日後WaR-, 村田±, Kahn卅, 57日後WaR-, 村田±, Kahn-, 99日後にWaR-, 村田+, Kahn+, 121日後WaR-, 村田-, Kahn+, その後135日, 150日, 158日, 211日といずれも陰性. べ. 療法後マハルセミン0.56g, クロロアーセミン1.1g 併用, べ. 療法中体重1.2kg減少, 40日後正常に復した.

第37例 加○与○市 51才男 商業 初診昭和25年8月23日 第3期潜伏梅毒

現症 自覚症状なく梅毒に気付かず. WaR+, 村田卅, Kahn卅 で自然排尿なく, 残尿200cc を認む.

治療及び経過 水べG. 60万1日2回分注, 総量600万単位. 300万単位でWaR±, 村田卅, Kahn卅. 600万単位終了時WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 5日後WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 25日後WaR卅, 村田卅, Kahn卅, 36日後WaR+, 村田卅, Kahn卅, 45日, 57日後はいずれもWaR卅, 村田卅, Kahn卅, 78日後WaR-, 村田+, Kahn± 95日後WaR-, 村田±, Kahn±. 全身症状に対しては240万

単位で自然排尿を認め残尿も115cc となり, 300万単位で残尿10cc, 480万単位で残尿全くなく排尿正常となつた. べ. 療法中体重0.3kg減少した. べ. 療法後マハルセミン1.82g, 次サ蒼鉛20回併用.

第38例 阿○喜○郎 71才男 工員 初診昭和25年9月11日 第3期潜伏梅毒

現症 WaR卅, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 水べG. 60万1日2回分注, 総量600万単位. 330万単位でWaR卅, 村田卅, Kahn卅, 600万単位終了時WaR卅, 村田卅, Kahn卅, その後無治療で観察するに, 19日後WaR-, 村田卅, Kahn卅, 33日後WaR+ 村田卅, Kahn+, 35日後WaR+, 村田卅, Kahn卅, 48日後WaR-, 村田卅, Kahn卅, 53日後WaR-, 村田卅, Kahn卅, 93日後WaR-, 村田+, Kahn+, 122日後WaR-, 村田+, Kahn+. べ. 療法中に体重0.6kg減少した.

第39例 藤○由○ 30才男 会社員 初診昭和26年2月8日 第3期潜伏梅毒

現症 約8年前硬性下疳に罹患, 約4ヶ月間治療. WaR卅, 村田卅, Kahn卅.

べ. 療法迄の治療 8/IIより28/IVまでにマハルセミン2.4g, 次サ蒼鉛12回注射, WaR卅, 村田卅, Kahn卅.

治療及び経過 水べG. 30万1日1回筋注, 総量240万単位. 150万単位でWaR卅, 村田卅, Kahn卅, 240万単位終了時WaR±, 村田+, Kahn+, 13日, 27日, 55日後はいずれもWaR-, 村田卅, Kahn卅, 97日, 140日後WaR-, 村田卅, Kahn卅, 254日後WaR+, 村田+, Kahn卅, 312日後WaR+, 村田卅, Kahn卅, 373日後WaR±, 村田卅, Kahn卅, 562日後WaR-, 村田±, Kahn卅. べ. 療法後マハルセミンを12.3g, ミノファーゲンAL71回併用. 体重は150万単位で1.5kg減少, 240万単位終了時更に0.8kg減少を認めた.

第40例 山○千○ 35才女 無職 初診昭和25年2月22日 第3期潜伏梅毒

現症 WaR卅, 村田卅, Kahn卅の外全身症状は認められない.

べ. 療法迄の治療 22/IIより15/VIIまでにク

クロアーセミン5.04g, マハルセミン0.64g, 次サ蒼鉛 23 回注射, WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

治療及び経過 水ペG. 60万 1日 2回分注, 総量 600万単位, 300万単位で WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 600万単位終了時 WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 16日後 WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

ペ. 療法後マハルセミン 0.56g, ミノファーゲン AL 6回併用, ペ療法中体重 0.3kg 減少した.

第 41 例 木○泰○ 43才男 農業 初診 昭和 25 年 10 月 17 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 12 年前硬性下疳に罹患, WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺でその他著変はない.

ペ. 療法迄の治療 17/Xより 24/Xまでにクロアーセミン 0.16g注射, WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

治療及び経過 水ペG. 30万 1日 1回筋注, 総量 570万単位, 270万単位で WaR[±], 村田[±], Kahn[±], 570万単位終了時 WaR[±], 村田[±], Kahn[±], 副作用はなんら認めなかつた.

第 42 例 蔵○茂○ 54才男 農業 初診 昭和 25 年 8 月 8 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 WaR⁻, 村田[±], Kahn[±].

ペ. 療法迄の治療 クロアーセミン 1.19g, 次サ蒼鉛 4回注射, WaR⁻, 村田[±], Kahn[±].

治療及び経過 水ペG. 60万 1日 2回分注, 総量 600万単位, 300万単位で WaR⁺, 村田[±], Kahn[±], 600万単位終了時には WaR⁺⁺, 村田[±], Kahn[±], 38日後 WaR⁺⁺, 村田[±], Kahn[±], ペ. 療法後マハルセミン0.56g 併用, ペ療法中に体重は 0.3kg減少した.

第 43 例 浅○年○ 47才男 会社員 初診 昭和 25 年 8 月 12 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 20年前血清反応陽性にて治療をうけ陰性となつた, WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

治療及び経過 水ペG. 60万 1日 2回分注, 総量 600万単位, 300万単位で WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 600万単位終了時 WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 11日後 WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 28日後WaR⁺⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 37日後に WaR⁺, 村田[±], Kahn[±], 50日後 WaR⁺⁺, 村田[±], Kahn[±], 64日後 WaR⁺⁺.

村田⁺⁺, Kahn⁺⁺. ペ. 療法後クロアーセミン 0.78g, マハルセミン0.3g, 次サ蒼鉛 17回併用. ペ. 療法中体重は 300万単位で 1.0kg減少したがペ. 終了時には正常に復した.

第 44 例 瀬○正○ 36才男 教員 初診 昭和 25 年 5 月 12 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 昭和 10 年頃数回感染機会があつた, WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺の外著変はない.

ペ療法迄の治療 クロアーセミン 0.86g, マハルセミン 0.32g, 次サ蒼鉛 19回, ミノファーゲン AL 10回注射, WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

治療及び経過 水ペG. 60万 1日 2回分注, 総量 600万単位, 300万単位で WaR⁺, 村田[±], Kahn[±], 600万単位終了時 WaR[±], 村田[±], Kahn[±], 30日後 WaR⁺, 村田[±], Kahn[±], 48日後 WaR⁺⁺, 村田[±], Kahn[±], 63日後に WaR[±], 村田[±], Kahn[±]. ペ. 療法後マハルセミン0.06g, 次サ蒼鉛 12回, ミノファーゲン AL 17回併用. ペ療法中体重 1.05kg 減少し, ペ. 注射中 37.2°C より 37.4°C の発熱があり, 終了後は平熱.

第 45 例 原○弘○ 29才男 鉄道員初診 昭和 26 年 7 月 18 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 7 年前硬性下疳に罹患, サ剤10回注射, WaR⁻, 村田⁺, Kahn[±].

治療及び経過 水ペG. 60万 1日 1回筋注, 総量 600万単位, 240万単位でWaR⁻, 村田⁻, Kahn[±], 600万単位終了時 WaR⁻, 村田⁻, Kahn[±], 11日後, 17日後は WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁺, 37日後 WaR⁻, 村田⁻, Kahn[±], 71日後WaR⁻, 村田⁺, Kahn⁺, 171日後に WaR⁻, 村田⁻, Kahn[±], その後 291日, 349日, 419日, 492日, 607日, 760日後の検査はいずれも陰性. 尚 349日目まではマハルセミン 8.8g 併用, その後は無治療. 副作用はなんら認められず, 体重の増減も全くなかつた.

第 46 例 大○勇○ 49才男 農業 初診 昭和 26 年 7 月 30 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 WaR⁺, 村田[±], Kahn[±].

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン0.22g注射, WaR[±], 村田[±], Kahn[±].

治療及び経過 水ペG, 60万 1日 1回筋注, 総量 600万単位. 240万単位で WaR-, 村田±, Kahn±, 600万単位終了時 WaR-, 村田-, Kahn-. 副作用はなんら認められない.

第47例 亀○利○ 71才男 無職 初診 昭和26年10月3日 第3期潜伏梅毒

現症 WaR±, 村田±, Kahn±.

べ. 療法迄の治療 マハルセミン 0.87g, ミノフェーゲン AL20回注射, WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG, 30万 1日 1回筋注, 総量 600万単位. 270万単位で WaR±, 村田±, Kahn±, 600万単位終了時 WaR±, 村田±, Kahn±, その後11日, 24日, 30日後の検査はいずれも WaR±, 村田±, Kahn±. べ. 終了後マハルセミン 0.88g 併用. べ. 療法中副作用はなんら認められなかつた.

第48例 中○清○ 34才男 会社員 初診昭和26年1月24日 第3期潜伏梅毒

現症 WaR-, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG, 30万 1日 1回筋注, 総量 2490万単位. 180万単位で WaR-, 村田-, Kahn±, 300万単位で WaR-, 村田-, Kahn±, 450万単位で WaR-, 村田-, Kahn±, 600万単位で WaR-, 村田+, Kahn±, 2490万単位終了時 WaR-, 村田-, Kahn-, その後3日, 17日, 109日といずれも陰性. べ. 療法中認むべき副作用はなかつた.

第49例 河○廉○ 69才男 弁護士 初診昭和26年3月14日 第3期潜伏梅毒

現症 25才の時感染機会, 約1ヶ月後陰茎に無痛性潰瘍を発生, 当時無治療. WaR±, 村田±, Kahn± のほか著変は認められない.

治療及び経過 水ペG, 60万 1日 2回分注, 総量 900万単位. 450万単位で WaR±, 村田±, Kahn±, 900万単位終了時 WaR±, 村田±, Kahn±, 6日後 WaR±, 村田±, Kahn±, その後11日, 17日, 26日, 86日後の検査はいずれも WaR±, 村田±, Kahn±. べ. 終了後マハルセミン 1.59g, ミノフェーゲン AL22回併用. べ. 療法中体重は 1.7kg 減少した.

第50例 西○敏○ 38才男 塩業 初診 昭和24年1月3日 第3期潜伏梅毒

現症 昭和21年血清反応陽性に気づき僅かに治療をうけた. WaR-, 村田+, Kahn+. べ. 療法迄の治療 マハルゾール 6.65g, 次サ蒼鉛 27回, ミノフェーゲン AL61回注射, WaR-, 村田±, Kahn+.

治療及び経過 結ベカ, 30万 1日 5回分注, 総量 600万単位. 180万単位で WaR-, 村田-, Kahn+, 270万単位で WaR-, 村田±, Kahn±, 360万単位 WaR-, 村田±, Kahn+, 600万単位終了時 WaR-, 村田-, Kahn+, 34日後 WaR-, 村田+, Kahn+, 72日後 WaR-, 村田-, Kahn±, 112日後 WaR-, 村田-, Kahn+, 136日後 WaR-, 村田-, Kahn-. べ. 終了後サ剤 7.29g 併用. べ. 療法中に体重は 300万単位で 2.6kg 減少, 540万単位で更に 5.1kg 減少, すなわち 7.7kg 減少した. べ. 終了後1ヶ月にて正常に復した.

第51例 高○大 31才男 商業 初診 昭和24年4月18日 第3期潜伏梅毒

現症 21才の時硬性下疳に罹患, 現在全身症状に著変なく, WaR±, 村田±, Kahn±.

べ. 療法迄の治療 18/IVより 25/VIまでにサ剤 30回, マハルセミン 0.12g, クロロアーセミン 0.06g, 次サ蒼鉛 7回注射, WaRなし, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 結ベカ, 30万 1日 5回分注, 総量 600万単位. 360万単位で WaR-, 村田±, Kahn±, 600万単位終了時 WaR±, 村田+, Kahn±, 13日後 WaR-, 村田-, Kahn±, 36日後 WaR-, 村田±, Kahn±, 67日後に WaR-, 村田-, Kahn+, 90日後 WaR-, 村田-, Kahn-, その後185日, 231日, 292日, 329日, 357日, 485日, 760日後の検査はいずれも陰性. なお90日まではマハルセミン 1.12g 併用, その後は無治療. べ. 療法中体重 1.5kg 減少した. 90万単位時に30分後に心悸亢進, 37.5°C 発熱, 不安感を認め, 20分間で消褪した.

第52例 高○岩○ 33才女 農業 初診

昭和23年7月11日 第3期潜伏梅毒

現症 約6年前陽性に気づき、サ剤約30回注射をうけた。WaR+, 村田+, Kahn+.

治療及び経過 水ペG.60万1日1回筋注, 総量1000万単位. 540万単位で WaR±, 村田+, Kahn+. 900万単位で WaR+, 村田+, Kahn+, 注射終了時及び7日後 WaR±, 村田+, Kahn+, 16日後 WaR±, 村田+, Kahn±. 27日後 WaR±, 村田+, Kahn±. ペ. 終了後マハルセミン 0.98g, ミノフーゲン Al 25 回併用. ペ療法中体重は240万単位で 0.8kg 減少したが1000万単位終了時には1.2kg 増加した.

第53例 松○清○ 36才女 無職 初診 昭和28年1月6日 第3期潜伏梅毒

現症 3年前陽性といわれたが無治療. WaR±, 村田±, Kahn±.

ペ. 療法迄の治療 6/Iより2/Xまでにマハルゾール57回, 次サ蒼鉛30回注射し, WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG.30万1日1回筋注, 総量450万単位. 150万単位で WaR±, 村田±, Kahn±. 300万単位で WaR±, 村田±, Kahn±. 450万単位終了時 WaR±, 村田±, Kahn±. ペ. 療法中体重は1.6kg 増加した.

第54例 片○み○り 27才女 工. 初診 昭和28年3月27日 第3期潜伏梅毒

現症 10年前に軟性下疳に罹患, 昭和25年7月血清反応陽性, マハルゾール100回注射. WaR±, 村田±, Kahn±.

ペ. 療法迄の治療 11/IVマラリア発熱療法を行つたが, WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG.30万1日1回筋注, 総量600万単位. 270万単位で WaR+, 村田±, Kahn±. 600万単位終了時 WaR±, 村田±, Kahn±. 29日後 WaR±, 村田±, Kahn±. ペ. 療法中体重は2.6kg 増加した. 270万単位後に, 注射20分後に前頭部に頭重感を訴へ, 30分後に消褪した.

第55例 野○光○ 54才男 守衛 初診 昭和28年2月3日 第3期潜伏梅毒

現症 23才の時硬性下疳に罹患, 昭和26年サ剤47回注射. WaR±, 村田±, Kahn±.

ペ. 療法迄の治療 25/IIマラリア発熱療法を行つたが, WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG.60万1日2回分注, 総量600万単位. 600万単位終了後 WaR±, 村田±, Kahn±. 5日後 WaR+, 村田±, Kahn±. 13日, 19日, 25日, 30日, 40日, 50日後といずれも WaR±, 村田±, Kahn±. 24/Vよりさらに水ペG.60万1日2回分注, 総量630万単位使用. 630万単位終了時 WaR+, 村田±, Kahn±. 2日後 WaR±, 村田±, Kahn±. 6日, 11日後と WaR±, 村田±, Kahn±. 19日後 WaR±, 村田±, Kahn±. ペ. 終了後マハルセミン 2.84g, ミノフーゲン Al 22 回併用. 第1回ペ. 療法中体重は0.8kg減少した. 本例は初診時に視力減退, すなわち右0.1, 左0.9, であつたが第1回ペ療法後右0.8, 左0.9と回復した.

第56例 後○シ○ノ 55才女 商業 初診 昭和28年4月22日 第3期潜伏梅毒

現症 夫は結婚前梅毒に罹患していた. 昨年陽性と言われ, サ剤10回注射. WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG.30万1日1回筋注, 総量750万単位. 300万単位で WaR±, 村田±, Kahn±. 600万単位で WaR+, 村田±, Kahn±. 750万単位終了時 WaR±, 村田±, Kahn± となつたので3日後にマラリア発熱療法併用したが, 6日後 WaR±, 村田±, Kahn±. 41日後 WaR±, 村田±, Kahn±. ペ. 療法中750万単位終了時に体重3.3kg 減少した.

第57例 藤○柳○ 71才男 商業 初診 昭和28年5月11日 第3期潜伏梅毒

現症 WaR±, 村田±, Kahn±.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン 0.98g, ミノフーゲン Al 11 回注射, WaR±, 村田±, Kahn±.

治療及び経過 水ペG.60万1日2回分注, 総量960万単位. 480万単位で WaR±, 村田±, Kahn±. 960万単位終了時に WaR±,

村田^卅, Kahn^卅. ペ. 療法中体重は 1.3kg 増加した.

第 58 例 大○徳○ 31才男 船員 初診
昭和 24 年 9 月 8 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 6 年前無痛性横痃, 血清反応陽性, サ剤 5.3g 注射. WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン 1.56g, 次サ蒼鉛 11 回注射, WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅.

治療及び経過 結晶ペニシリンナトリウム塩 40 万 1 日 4 回分注. 総量 560 万単位. 200 万単位で WaR[±], 村田^卅, Kahn^卅, 360 万単位で WaR^{なし}, 村田⁺, Kahn⁺, 480 万単位で WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁺, 560 万単位終了時 WaR⁻, 村田⁺, Kahn⁺. ペ. 療法中体重は 400 万単位で 0.7kg 減少した.

第 59 例 藤○茂 45 才男 会社員 初診
昭和 28 年 8 月 24 日 第 3 期潜伏梅毒.

現症 約 10 年前硬性下疳に罹感, サ剤約 15 回注射. 全身症状に著変なく, 凝集法^卅, スライド法^卅.

ペ療法迄の治療 マハルセミン 4.14g, 次サ蒼鉛 49 回注射, 凝集法^卅, スライド法^卅.

治療及び経過 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位. 300 万単位終了時凝集法^卅, スライド法^卅, その後 38 日, 75 日, 93 日といずれも凝集法^卅, スライド法^卅. 副作用はなんら認めべきものはなかった.

第 60 例 小○和○ 36 才女 無職 初診
昭和 29 年 8 月 7 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 5 年前血清反応陽性といわれ, マハルゾール 10 回注射. 凝集法^卅, スライド法^卅の外には著変を認めない.

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 600 万単位. 注射終了時凝集法⁺, スライド法^卅, 21 日後凝集法⁻, スライド法⁺, 42 日後凝集法⁻, スライド法⁻, その後 67 日, 83 日, 107 日後の検査はいずれも陰性. 注射終了後マハルセミン 2.56g, 次サ蒼鉛 26 回併用. ペ. 療法中副作用は全くなかった.

第 61 例 佐○す○ 54 才女 無職 初診
昭和 28 年 1 月 12 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 夫が約 15 年前駆梅療法をうけたこ

とがある. WaR^卅. 村田^卅, Kahn^卅.

治療及び経過 油ペ G. 60 万 1 日 2 回分注, 総量 1800 万単位. 600 万単位で WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅, 1200 万単位で WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅, 1800 万単位終了時 WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅, その後 5 日, 20 日, 25 日, 56 日, 80 日, いずれも WaR^卅, 村田^卅, Kahn^卅. ペ. 終了後マハルセミン 2.15g, 次サ蒼鉛 24 回併用.

第 62 例 荒○美○子 41 才女 無職 初診
昭和 28 年 8 月 1 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 昭和 21 年血清反応陽性, サ剤約 10 回注射. 全身症状に著変なく, 凝集法^卅, スライド法^卅.

治療及び経過 油ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位. 300 万単位終了時凝集法^卅, スライド法^卅, その後 15 日, 43 日, 76 日, 123 日後の検査はいずれも凝集法^卅, スライド法^卅. ペ. 終了後マハルセミン 2.08g, 次サ蒼鉛 24 回併用. 副作用は全く認められなかった.

第 63 例 藤○キ○ 46 才女 無職 初診
昭和 27 年 12 月 24 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 6 年前梅毒といわれ, サ剤約 20 回注射. 凝集法⁻, スライド法⁻.

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 1500 万単位. 900 万単位で凝集法^卅, スライド法^卅, 1500 万単位終了時凝集法[±], スライド法[±], 10 日後, 凝集法⁺, スライド法⁺, 23 日後凝集法⁺, スライド法⁻, 30 日後凝集法[±], スライド法[±], 47 日後凝集法⁻, スライド法⁻, その後 61 日, 87 日, 104 日後の検査はいずれも陰性.

第 64 例 西○コ○ミ 39 才女 無職 初診
昭和 29 年 6 月 7 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 10 数年前感染機会, 4 年前血清反応陽性, マハルゾール 40 回注射. 凝集法^卅, スライド法^卅.

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 1 回筋注, 総量 1440 万単位. 1200 万単位で凝集法^卅, スライド法^卅, 終了時凝集法^卅, スライド法⁺, 30 日後凝集法⁻, スライド法⁻, その後

63日, 82日といずれも陰性. ペ. 終了後マハルセミン 1.24g, 次サ蒼鉛 15 回併用.

第 65 例 角○佐○ 45 才男 商業 初診
昭和 27 年 10 月 15 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 12 年前冠状溝に無痛性潰瘍発生. サ剤約 15 回注射. WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン 2.46g, 次サ蒼鉛 20 回注射, WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊.

治療及び経過 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位. 300 万単位終了時 WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊, 10 日後 WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊, 21 日後 WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊, 38 日後, 53 日後 WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊. 終了後マハルセミン 1.3g, 次サ蒼鉛 12 回併用.

第 66 例 妹○好○ 36 才男 会社員 初診
昭和 23 年 5 月 20 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 10 年前硬性下疳に罹患, サ剤 12 回注射. 凝集法₊₊, スライド法₊₊.

治療及び経過 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位. 300 万単位終了時凝集法₊₊, スライド法₊₊, 20 日後凝集法₊₊, スライド法₊₊, 41 日後凝集法₊₊, スライド法₊₊.

第 67 例 高○秀○ 50 才男 無職 初診
昭和 28 年 3 月 7 日 第 3 期潜伏梅毒

現症 約 15 年前陰茎に無痛性潰瘍発生, 放置. 凝集法₊₊, スライド法₊₊.

治療及び経過 油ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位. 300 万単位終了時凝集法₊₊, スライド法₊₊, 12 日後凝集法₊₊, スライド法₊₊, 34 日後凝集法₊₊, スライド法₊₊. 副作用はなんら認められなかつた. ペ. 終了後マハルセミン 0.64g, 次サ蒼鉛 6 回併用.

護膜腫

第 68 例 小○佐○郎 39 才男 官吏 初診
昭和 26 年 1 月 22 日 護膜腫

現症 昭和 9 年淋疾に罹患, 昭和 24 年 5 月右頬の中央に暗赤色大豆大の丘疹生じ, 次第に増大, 周囲に蛇行状に拡大, 一部潰瘍となる. 右頬部に手掌大の病竈を認め, 周縁部著明な浸潤を示し, 淡紅色又は暗赤色を呈

す. 病竈の中央に蛇行状潰瘍あり, その中央部は瘰癧化を示す. WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊.

ペ. 療法迄の治療 マハルセミン 0.18g.

治療及び経過 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 210 万単位. 120 万単位で WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊, 180 万単位で WaR₊₊, 村田₊₊, Kahn₊₊, 5 日後 WaR₋, 村田₊₊, Kahn₊₊, 12 日後 WaR₋, 村田₊₊, Kahn₊₊, 27 日後 WaR_±, 村田₊₊, Kahn₊₊. 皮疹は 150 万単位で紅斑著明に褪色, 潰瘍は瘰癧化. 210 万単位で周辺部の丘疹状結節は著明に扁平化し, 暗赤色の色調褪色. ペ. 療法中に体重 2.5kg 減少した. ペ. 終了後マハルセミン 0.24g, ミノフェーゲン AL14 回併用した.

第 69 例 鈴○正○ 38 才男 会社員 初診
昭和 26 年 5 月 26 日 睪丸護膜腫

現症 33 才の時梅毒に気づき, サ剤 13 回注射. 21/V 5 里許り歩いた後に 23/V 右睪丸の腫脹を認め, 疼痛は全くなく腫脹は次第に増大, 同時に全身倦怠, 食思不振を覚えた. 右睪丸の大きさは $7.5 \times 7 \times 5$ cm で表面平滑, 硬度平等に硬, WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊.

治療及び経過 複ペ. 40 万 1 日 1 回筋注, その後水ペ G. 60 万 1 日 2 回分注. 総量 640 万単位. 腫瘍の大きさは 100 万単位で $5.2 \times 3.7 \times 3.4$ cm となり, 280 万単位で $4.7 \times 3.4 \times 3.2$ cm, 640 万単位終了時には左側と同大となつた. 血清反応は 340 万単位で WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊, 640 万終了時 WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊. ペ. 療法中体重は 1.4kg 減少したが全身倦怠感消失.

前立腺梅毒

第 70 例 樋○光○ 53 才男 建築業 初診
昭和 28 年 4 月 18 日 前立腺梅毒

現症 5 年前血清反応陽性なるも放置. 4 年前より残尿感, 2 年前より尿線細小微弱, 昨年 9 月より尿線はマッチ棒位の太さとなり 2 月頃より尿意頻数, 排尿痛を覚えた. 前立腺は腫大, 両葉非対側性, 左葉が右葉より大, 表面は部分的に結節状, 著明に硬く, 軽度の圧痛を有する. WaR₊₊₊, 村田₊₊₊, Kahn₊₊₊.

治療及び経過 水ペ G. 60 万 1 日 2 回分注、総量 1380 万単位。臨床症状に対しては 300 万単位で尿線相当太くなり迸出力も顕著に力強くなった。排尿痛は全く消失。排尿も円滑。600 万単位で尿線、排尿共に正常となる。1380 万単位終了時には直腸診にて前立腺正常となつた。血清反応は 360 万単位で WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、1380 万単位終了時 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、42 日後 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、72 日後 82 日後は WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、148 日後 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。ペ。終了後マハルセミン 1.26g 併用。ペ。療法中副作用はなんらなく、体重は 0.2kg 増加した。

脊 髄 癆

第 71 例 国○否○郎 60 才男 無職 初診昭和 26 年 5 月 7 日 脊髄癆

現症 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺

ペ。療法迄の治療 マハルセミン 0.41g、次サ蒼鉛 4 回注射、WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。

治療及び経過 複ペ。40 万 1 日 1 回筋注、総量 440 万単位。160 万単位で WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、440 万単位終了時に WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。副作用は全く認められなかつた。

第 72 例 高○繁○ 42 才男 商業 初診昭和 25 年 5 月 22 日 脊髄癆

現症 昭和 2 年頃硬性下疳に罹患、サ剤約 10 回注射。約 2 年前より下腿、足背にシビレ感、マハルゾール 76 回、次サ蒼鉛 44 回、サ剤 17 回注射して消褪。WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。

治療及び経過 結ペカ。30 万 1 日 6 回分注、総量 600 万単位。600 万単位終了時 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺、その後無治療で 142 日後 WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。ペ。療法中第 3 日、第 4 日に毎回注射後 30 分に前頭部の頭重感約 20 分続いた。体重は 0.3kg 減少した。

・梅毒性脊髄炎

第 73 例 水○啓○ 35 才男 無職 初診昭和 27 年 3 月 6 日 梅毒性脊髄炎

現症 1 月 14 日突然両側の下肢にシビレ感生じ、尿排不能となる。WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺で起立不能、右下肢 S₁ 以下痛温冷覚欠損、左下肢 S₁₁ 以下痛温冷覚欠損、尿屎失禁を認む。

治療及び経過 水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注、総量 600 万単位。600 万単位終了時 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、13 日後に WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、43 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、45 日後 WaR[±]、村田⁺、Kahn⁺、43 日後より水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注、総量 90 万単位使用。更に 45 日後より油ペ G. 300 万 1 日 1 回筋注、総量 900 万単位使用した。その後 6 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、12 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、21 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、27 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、32 日後 WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、37 日後、46 日後は WaR⁻、村田⁺、Kahn⁺、52 日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn[±]、62 日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、67 日後 WaR⁻、村田[±]、Kahn⁺、72 日後 WaR⁻、村田[±]、Kahn⁺となり更に水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注、総量 360 万単位使用、360 万単位終了時 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁺、10 日後に WaR⁻、村田⁻、Kahn[±]、20 日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁺、更に水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注、総量 540 万単位使用、540 万単位終了時に WaR⁻、村田⁻、Kahn[±]、更に 3/X より水ペ G. 30 万 1 日 1 回筋注、総量 300 万単位使用、終了時 WaR⁻、村田⁻、Kahn[±]、その後 8 日、41 日後と WaR⁻、村田⁻、Kahn[±]、109 日後に WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻、460 日後 WaR⁻、村田⁻、Kahn⁻。なおこの期間にマハルセミンを 1.72g 併用したのみである。副作用はなんら認めなかつた。臨床症状にはあまり変化は認められなかつた。

先天梅毒

第 74 例 池○良○ 20 才女 生徒 初診昭和 25 年 4 月 24 日 先天梅毒

現症 昨年先天梅毒といわれマハルゾール 28 回注射。軽度の鞍鼻及びハツチンソン氏歯を認め、WaR⁺、村田⁺、Kahn⁺。

べ、療法迄の治療 24/IV より 9/X までにクロロアーセミン 2.78g, マハルセミン 0.66g 注射, WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺.

治療及び経過 水べ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 120 万単位, 120 万単位終了時 WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 昭和 26 年 4 月 21 日より水べ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 810 万単位使用, 6 日後 WaR⁺⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, その後無治療で 150 日後 WaR[±], 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 360 日後 WaR⁺, 村田⁺⁺, Kahn⁺⁺, 550 日後 WaR⁻, 村田[±], Kahn⁻. べ, 810 万単位使用前にクロロアーセミン 0.36g, マハルセミン 0.72g 併用, べ, 療法中副作用はなんら認められなかつた.

第 75 例 原○洋○ 3 才女 初診昭和 25 年 2 月 1 日 先天梅毒

現症 生後まもなく鼻閉に気づき, 先天梅毒と言われマハルゾール 0.835g 注射, WaR⁻, 村田[±], Kahn[±].

治療及び経過 水べ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 600 万単位, 300 万単位で WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁺, 600 万単位終了時 WaR⁻, 村田⁻, Kahn[±], 34 日後 WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁻, その後 69 日, 96 日後と WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁻, 油べ G. 30 万 1 日 1 回筋注, 総量 300 万単位使用, 300 万単位終了時 WaR^{なし}, 村田⁻, Kahn⁻, 135 日, 165 日, 230 日, 290 日後といずれも WaR⁻, 村田⁻, Kahn⁻. べ, 療法後マハルセミン 0.135g 併用, べ, 療法中副作用はなんら認められなかつた.

第 3 章 皮疹に及ぼす影響

梅毒の経過中に発生した各期の皮疹に対してペニシリンはいかなる影響を及ぼすか, すなわちスピロヘータの消失状況, 下疳潰瘍の治癒, 硬結の消褪, 淋巴腺腫脹の減退, 第 2 期疹の消褪経過, 護膜腫に対する影響等について, 第 2 章に詳述した実験成績を基本にして検討を加えてみたい.

第 1 例硬性下疳においては, 2 日目すなわち 60 万単位注射にて潰瘍周縁の壊死性変化は軽快し, 300 万単位で潰瘍の肉芽形成良好

となり, 570 万単位で上皮形成が認められた. 潰瘍部の硬結は注射終了後 13 日で軟化消失した. この経過中血清反応には変化は認められなかつた.

第 2 例初期梅毒の淋巴腺腫脹は 600 万単位で殆んど消失せしめ得た.

第 3 例においてスピロヘータは注射 2 日目すなわち 60 万単位で証明出来なくなり, 90 万単位で周囲の壊死性組織は自然に剝離, 肉芽良好となり, 300 万単位で淋巴腺腫脹の消失を認め, 潰瘍面の上皮形成著明で終了後 11 日で潰瘍治癒した. この期間の血清反応は変化が認められなかつた.

第 4 例においても 2 日目すなわち 60 万単位でスピロヘータは消失し, 300 万単位で潰瘍稍縮小, 肉芽良好となり注射終了後 13 日で治癒した. 血清反応には変化は認められない.

第 5 例では 3 日目すなわち 60 万単位でスピロヘータは証明できなくなり, 90 万単位で下疳は軟化乾燥, 210 万単位終了後, すなわち 8 日目に潰瘍の治癒を認めた.

第 6 例では 2 日目すなわち 30 万単位注射後に下疳周縁は扁平化し, スピロヘータは消失, 90 万単位で潰瘍著明に縮小し, 150 万単位すなわち 6 日目に治癒した.

第 7 例は 60 万単位すなわち 2 日目に周辺の痂皮剝離し, 潰瘍の肉芽良好, 60 万単位でスピロヘータは消失, 240 万単位にて潰瘍著明に縮小し, 600 万単位すなわち 10 日目に潰瘍は癒痕治癒し, 硬結も消褪した.

第 8 例では 60 万単位でスピロヘータ消失, 120 万単位で潰瘍肉芽著明に良好となり 300 万単位にて治癒した. 硬結は 9 日目に軟化し, 消失した.

第 9 例においては 60 万単位で潰瘍は軟化乾燥し, 480 万単位で著明に縮小, 600 万単位で癒痕治癒した.

次に第 2 期梅毒疹に対しては.

第 10 例の梅毒性薔薇疹, 丘疹は 60 万単位にてすなわち 3 日目に紅斑著明に褪色し, 90 万単位で丘疹も次第に吸収, 150 万単位で皮疹

は完全に消失した。血清反応には変化はない。

第11例では90万単位すなわち2日目午後には、大小陰唇の腫脹消褪し、丘疹表面乾燥、210万単位で丘疹ほとんど消褪しわずかに硬結を残すのみとなり450万単位で硬結も消失した。

第12例は180万単位すなわち4日目に四肢の丘疹消失、色調褪色し、270万単位で顔面の丘疹も消失した。血清反応には変化はない。

第13例においては150万単位すなわち3日目午後には丘疹の色調稍褪色し、300万単位で丘疹扁平化し、360万単位で殆んど消失し、600万単位で完全に消失した。この期間中の血清反応には変化は見られなかつた。

・ 護膜腫について検討するに

第68例では150万単位すなわち6日目に紅斑著明に消褪し、潰瘍は癒着化する。210万単位で周辺部の丘疹状結節著明に扁平化、暗赤色の色調消褪した。血清反応は殆んど変化を認められなかつた。

第69例の睪丸護膜腫では初診時7.5×7×5cmの腫瘍が100万単位すなわち3日目に5.2×3.7×3.4cmとなり、280万単位で4.7×3.4×3.2cmと縮小し、640万単位で左側と同大となつた。

この期間の血清反応は全く変化がなかつた。以上の結果を総合すれば、第1期梅毒においてスピロヘータの消失には30万単位乃至60万単位すなわち2ないし3日、平均2.1日を要し、壊死性組織の剝離は60万乃至90万単位、2ないし3、平均2.3日、肉芽良好となるに60万ないし300万単位、2ないし6日、平均3.6日、潰瘍縮小に90万ないし480万単位、4ないし8日、平均5.6日、潰瘍治癒には150万ないし600万単位、6ないし13日、平均9.3日、硬結消失には9ないし23日、平均14日を要する。第2期梅毒疹においては紅斑の消褪に60万ないし180万単位、3ないし4日、平均3.3日、丘疹消失には150万ないし600万単位、5ないし10日、平均7.2日を要する。護膜腫においても150万ないし640万単位、6ないし10

日にて極めて卓効を認める。

小括) 以上の実験成績よりペニシリンは各期梅毒の皮疹を速かに消褪せしめ得るものであり、梅毒の各症期に関係せず皮疹に対してはほぼ同時に消失せしめる事が出来る。しかし皮疹は消失しても血清反応にはほとんど変化は認められない。

皮疹に及ぼす影響に関しては、ペニシリンの使用法には関係なく、ペニシリンの使用量にのみ関係すると思われる。すなわち少量ずつ投与すれば皮疹の消褪に長期間を要し、大量使用すれば短時間にて皮疹を消褪せしめ得る。

第4章 血清反応に及ぼす影響

駆梅効果を論ずるに最も根本的とみなされる血清反応に対し、ペニシリンはどんな影響を与えるであろうか、あるいは、もつとも効果的な用法はどうであろうか、これらにつき第2章に詳述した実験成績を基礎にして、つぎの如く分類し検討する。

- (1) 血清反応の消長
- (2) 用量と血清反応の関係
- (3) 使用法と血清反応の関係
- (4) 副作用

第1項 血清反応の消長

実験成績について、血清反応の結果からその成績を検討すると第1表の如くである。以下陰転とは、WaR、村田、Kahnの3反応が、あるいは凝集法、スライド法の2反応がともに陰性化したものを陰転例として以上の反応を総合的にみて減退したものを減弱例とした。

以上の成績を一括すれば、陰転22例、減弱23例、不変30例である。さらに各症期について詳しく検討を加えてみる。表中注射後の血清反応の日附は、注射終了日を第1日として計算したものである。

第1期梅毒9例(第2表参照)

血清陰性期4例は300万ないし780万単位の注射で陰性化し、27ないし205日迄陰性を続けている。

血清陽性期5例は600万ないし630万単位

第1表 血清反応の消長

症 期	血清反応	陰転例	減弱例	不変例
第1期梅毒	9	7	2	0
第2期顕症梅毒	4	1	2	1
第2期潜伏梅毒	10	2	5	3
第3期潜伏梅毒	44	10	12	22
護 謨 腫	2	0	0	2
前立腺梅毒	1	0	0	1
脊 髓 癆	2	0	1	1
梅毒性脊髓炎	1	1	0	0
先天梅毒	2	1	1	0
計 75 例		22	23	30

の注射で3例陰転、2例減弱である、陰転例は44日、60日後20日後に陰性化し、102日ないし198日まで陰性である。減弱例についても更に経過観察すれば陰性化するものと思われる。これを見ると第1期梅毒におけるべ、の血清反応に対する著効は決定的であると言ひ得る。

第2期顕症梅毒4例中、症例13は254日後に陰性化し、295日まで陰性を示している。症例11、12も23日、46日後著明に減退し、漸次陰性化の傾向を示している。（第3表参照）

第2表 第1期梅毒

血清陰性期

症例番号	総量(用法) ×は回数	べ療法迄 の 治 療	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
5	300(30.10×)	なし	なし	---	---	(1, 17, 60)
6	300(30.10×)	なし	なし	---	---	(1, 3, 27)
7	780(60.13×)	なし	なし	---	---	(1, 10, 23, 31, 55, 86, 123)
8	600(60.10×)	なし	なし	---	---	(1, 12, 50, 70, 90, 120, 150, 205)

血清陽性期

症例番号	総量(用法) ×は回数	べ療法迄 の 治 療	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
1	630(60.11×)	なし	M. 2.44	+++	++ (1) - ± ++ (13, 19)	---
2	1日4回分注 600(60.10×)	なし	なし	+++	+++ (1) - +++ (9, 14) - - ++ (35)	+++ (47) - - - (60, 72, 83, 116, 198)
3	1日2回分注 600(60.10×)	なし	なし	+++	+++ (1) + +++ (9) ± +++ (21) - ± + (46)	+++ (73)
4	1日2回分注 600(60.10×)	なし	なし	+++	- ± + (6, 30)	
9	600(60.10×)	なし	なし	++	- - (20, 40, 65, 83, 102)	

第3表 第2期顕症梅毒

症例番号	総量(用法) ×は回数	べ療法迄 の 治 療	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
10	150(30.5×)	なし	なし	+++	+++ (1)	
11	1日2回分注 630(60.11×)	なし	なし	+++	± +++ (1) - +++ (23)	
12	1日2回分注 600(60.10×)	なし	なし	+++	+++ (1) + +++ (9) ± +++ (21) - ± + (46)	+++ (73)
13	1日2回分注 600(60.10×)	なし	なし	+++	+++ (1, 3, 25) ± +++ (43, 61) - ++ (78)	+++ (126) - ± ± (145) - - + (204)
					- - ± (229) - - - (254, 295)	

第2期潜伏梅毒10例中9例は、療法までに砒素、蒼鉛剤で相当に駆梅療法を行っているが、血清反応強陽性を示すものである。これらに対して相当に血清反応の変化を認めることができた。症例16, 23は161日, 35

日後に陰性化し, 208日, 91日まで陰性を示している。症例18は53日後に陰性化した。71日後に再び Kahn+となつた例であり、いずれにせよ第2期潜伏梅毒においても適当に効果を認めることが出来た。(第4表参照)

第4表 第2期潜伏梅毒

症例 番号	総量(用法) ×は回数	療法迄 の 治 療	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
14	1日4回分注 600(60.10×)	C. 0.86 B. 10×	なし	+++	++ + (1) - ++ (28)	
15	600(40.6× 30.13×)	M. 0.28 B. 4×	M. 0.82	+++	+++ (1) ++ ++ (13) +++ (31) +++ (52)	
16	720(60.12×)	S. 0.36	なし	+++	- ++ (1.6)	
	1日2回分注 990(60.17×)	マラリヤ 発熱療法	なし	+++	- ++ (1) - ++ (27, 44, 62, 83) - - ± (122, 150) - - - (161, 173, 208)	
17	2100(60.35×)	S. 2.85	なし	+++	- ++ (600万) - + ++ (1800万) - ± + (2100万)	
18	630(60.11×)	C. 3.55 B. 32×	M. 1.37 B. 6×	- ± ++	- ± + (1) - - + (11, 25, 37) - - - (53) - - + (71, 330)	
19	1日2回分注 900(60.15×)	S. 8×	C. 0.3	+++	+++ (1) +++ (12)	
20	1日2回分注 600(30.20×)	S. 20×	なし	+++	++ ++ (450万) ++ ++ (1)	
21	300(30.10×)	なし	なし	+++	+ ++ (1) ± ++ (51)	
22	600(30.20×)	M. 1.62	なし	- - +	- - ± (1)	
23	600(60.10×)	S. 10×	M. 1.45	++ +	++ - (1) ++ + (11) + - (23) - - (35, 63, 91)	
		M. 4×	B. 12×			

第3期潜伏梅毒44例中10例は600万ないし2490万単位の注射で、30ないし291日後に陰性化し、'82ないし760日後まで陰性を示している。このうち症例29, 36, 50, 51, 64は、療法までに砒素、蒼鉛剤による強力

な駆梅療法を行つたが、抗療性を示したものである。しかし22例においては、300万ないし1230万単位注射するもなんら血清反応に変化を認めることはできなかった。(第5表参照)

第5表 第3期潜伏梅毒

症例 番号	総量(用法) ×は回数	療法迄 の 治 療	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
24	1日2回分注 1560(60.26×)	ペ. 1200万 マラリヤ 発熱療法	なし	+ ++	- ++ (1) - ++ (5) ± ± ± (11) - ± ++ (16) - - + (25) - ± ± (35, 40, 50, 70)	
25	750(150.3×)	なし	なし	+++	+++ (1)	
26	300(30.10×)	M. 0.34	M. 0.62 B. 7×	- ++	- ++ (1) - ++ (14) - ± ± (60)	
27	1日2回分注 750(60.13×)	なし	M. 0.49	+++	+++ (1) +++ (2) + ++ (9) +++ (18, 24) ± ++ (34, 38) - ++ (45, 87)	
28	600(60.10×)	M. 0.96	M. 1.88	+ ++	- + ++ (1) ± + ++ (11) - +++ (29) +++ (48)	
29	600(30.20×)	M. 3.53 C. 5.68 B. 15×	M. 0.72	- ± ±	- - - (1, 15, 63) - - ± (155, 174, 191) - - - (205, 226, 261, 316, 378, 466, 564, 663)	
30	600(40.15×)	M. 1.5 B. 21×	M. 0.16	+ ++	± + + (1) - ± + (25, 120) - + + (498) - ± ± (627)	

31	750(150.3×)	M. 0.08	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(1)
32	600 ^(04.3×) _(30.16×)	M. 2.1 C. 0.28 B. 18×	な し	± 卅 卅	卅卅卅(1) - 卅卅(7)
33	1020(60.17×)	な し	な し	卅 卅 卅	一卅卅(240万) - 卅卅(600万) - 一卅(1020万).
34	1日2回分注 1110(60.19×)	べ1200万 M. 65× S. 24× マラリヤ 療法	な し	± 卅 卅	一 - 一 + (600万) - 一 ± ± (1110万) - 一 ± ± (28)
35	540 ^(40.3×) _(30.14×)	M. 0.08	な し	卅 卅 卅	一 - 一 ± (1) - 一 - 一 ± (23) - 一 ± ± (32)
36	1日2回分注 330(30.11×)	M. 2.56 C. 2.54 B. 41×	M. 0.56 C. 1.1	+ + 卅	一 + 卅(1) - 一 ± 卅(40) - 一 ± - (57) - 一 + + (99) 一 - 一 + (121) - 一 - 一 (135, 150, 158, 211)
37	1日2回分注 600(60.10×)	な し	M. 1.82 B. 20×	卅 卅 卅	卅卅卅(1) 卅卅卅(5) 卅卅卅(25) + 卅卅卅(36) 卅卅卅(45, 57) - 一 ± ± (78) - 一 ± ± (95)
38	1日2回分注 600(60.10×)	な し	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(1) - 卅卅卅(19) + 卅卅(33) + 卅卅(35) 一卅卅(48, 53) - 一 + + (93, 122)
39	240(30.8×)	M. 2.4 B. 12×	M. 12.3	卅 卅 卅	± + + (1) - 一卅卅(13, 27, 55) - 一卅卅(97, 140) + + 卅(254) + 卅卅(312) ± 卅卅(373) - 一 ± 卅(562)
40	1日2回分注 600(60.10×)	C. 5.04 M. 0.64 B. 23×	M. 0.56	卅 卅 卅	卅卅卅(1) 卅卅卅(16)
41	570(30.19×)	C. 0.16	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(1)
42	1日2回分注 600(60.10×)	C. 1.19 B. 4×	M. 0.56	+ 卅 卅	卅卅卅(1) 卅卅卅(38)
43	1日2回分注 600(60.10×)	M. 10×	C. 0.78 M. 0.3 B. 17×	卅 卅 卅	卅卅卅(1) 卅卅卅(11) 卅卅卅(28) + 卅卅卅(37) 卅卅卅(50) 卅卅卅(64)
44	1日2回分注 600(60.10×)	C. 0.86 M. 0.32 B. 19×	M. 0.06 B. 12×	卅 卅 卅	± 卅 卅(1) + 卅卅卅(30) 卅卅卅(48) ± 卅 卅(63)
45	600(60.10×)	な し	M. 8.8	- + 卅	一 - 一 ± (1) - 一 - 一 + (11, 17) - 一 - 一 ± (37) - 一 + + (71) 一 - 一 (±171) - 一 - 一 (291, 349, 419, 492, 607, 760)
46	600(60.10×)	M. 0.22	な し	± 卅 卅	一 ± 卅(240万) - 一 - 一 (1)
47	600(30.20×)	M. 0.87	M. 0.88	卅 卅 卅	卅卅卅(1) 卅卅卅(11, 24, 30)
48	2490(30.83×)	な し	な し	- ± 卅	一 - 一 卅(180万, 300万, 450万) - 一 - 一 (1, 3, 17, 109)
49	1日2回分注 900(60.15×)	な し	M. 1.59	卅 卅 卅	卅卅卅(1, 6) 卅卅卅(11, 17, 26, 86)
50	1日5回分注 600(30.20×)	M. 6.65 B. 27×	S. 729	- ± +	一 - 一 + (1) - 一 + + (34) - 一 - 一 ± (72) - 一 - 一 + (112) 一 - 一 - (136)
51	1日5回分注 600(30.20×)	S. 30× M. 0.12 C. 0.06 B. 7×	M. 1.12	なし 卅 卅	± + 卅(1) - 一 - 一 ± (13) - 一 ± ± (36) - 一 - 一 + (67) 一 - 一 - (90, 185, 261, 292, 320, 357, 485, 760)
52	1000(60.17×)	S. 30×	M. 0.98	+ 卅 卅	± + + (1, 7) ± 卅 卅(16) ± 卅 卅(27)
53	450(30.15×)	M. 57× B. 30×	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(300万) + 卅卅(1)
54	600(30.20×)	M. 100× マラリヤ 療法	な し	卅 卅 卅	± 卅 卅(1, 29)
55	1日2回分注 600(60.10×)	S. 47× マラリヤ 療法	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(1) + 卅卅(5) 卅卅卅(13, 19, 25, 30, 40, 50)
	1日2回分注 630(60.11×)		M. 2.84	卅 卅 卅	+ 卅 卅(1) 卅卅卅(2) ± 卅 卅(6, 11) 卅卅卅(19)
56	750(30.25×)	S. 10×	M. 0.18 マラリヤ 療法	± 卅 卅	卅卅卅(1) ± 卅 卅(6, 41)
57	1日2回分注 960(60.16×)	M. 0.98	な し	卅 卅 卅	卅卅卅(480万) 卅卅卅(1)
58	1日4回分注 560(40.14×)	M. 1.56 B. 11×	M. 0.3 C. 0.24	卅 卅 卅	一 - 一 + (480万) - 一 + + (1)

59	300(30.10×)	M. 4.14 B. 49×	なし	+++	+++ (1, 38, 75, 93)
60	600(60.10×)	なし	M. 2.56 B. 26×	++	++(1) - + (21) - - (42, 67, 83, 107)
61	1日2回分注 1800(60.30×)	なし	M. 2.15 B. 24×	+++	++++ (1, 5, 20, 25, 56, 80)
62	300(30.10×)	なし	M. 2.08 B. 24×	++	+++ (1, 15, 43, 76, 123)
63	1500(60.25×)	なし	なし	++	±±(1) + + (10) + - (23) ±±(30) -- (47, 61, 87, 104)
64	1440(60.24×)	M. 40×	M. 1.24 B. 15×	+++	++(1) - - (30, 63, 82)
65	300(30.10×)	M. 2.46 B. 20×	M. 1.3 B. 12×	+++	++++ (1) + + + + (10) + + + + (21) + + + + (38, 53)
66	300(30.10×)	なし	なし	++	+++ (1, 20, 41)
67	300(30.10×)	なし	M. 0.64 B. 6×	++	+++ (1, 12, 34)

護謨腫，前立腺梅毒に対しては640万ないなく強陽性で，血清反応に関してはペ。の効
し1380万単位注射したが，148日まで変化果はあまり期待できない。（第6表参照）

第6表 護謨腫及び前立腺梅毒

護謨腫

症例 番号	総量(用法) ×は回数	ペ療法迄 の治療	併用療法	血清反応		
				注射前	注射	後
68	210(30.7×)	M. 0.18	M. 0.24	+++	+++ (180万)	++ (5, 12) ± + (27)
69	640 (40.1×) 60.9× 1日2回分注	なし	なし	+++	+++ (340万)	+++ (1)

前立腺梅毒

症例 番号	総量(用法) ×は回数	ペ療法迄 の治療	併用療法	血清反応		
				注射後	注射	後
70	1日2回分注 1380(60.23×)	なし	M. 1.26	+++	+++ (1, 42) + + + + (72, 82)	+++ (148)

脊髄癆，梅毒性脊髄炎においては，症例72る。症例73においても臨床症状にはあまり
の如く相当強力な駆梅療法にても強陽性を示変化はなかつたが109日後に陰性化し，460
したもののに対しても，併用療法を行わずに日後まで陰性を続けている。（第7表参照）
142日後にかなり血清反応の減退を示してい

第7表 脊髄癆及び梅毒性脊髄炎

脊髄癆

症例 番号	総量(用法) ×は回数	ペ療法迄 の治療	併用療法	血清反応		
				注射前	注射	後
71	440(40.11×)	M. 0.41 B. 4×	なし	+++	+++ (1)	
72	1日6回分注 600(30.20×)	M. 76×	なし	+++	+++ (1) ± + ± (142)	

梅毒性脊髄炎

症例 番号	総量(用法) ×は回数	ペ療法迄 の療法	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
73	600(30.20×)	なし	M. 1.72	+++	+++ (1) - ++ (13) - +++ (43) ± +++ (45)	
	90(30.3×)			± ++	- ++ (6) - ++ (12) - ++ (21) - ++ (27)	
	900(300.3×)				- ± + (32) - ± ± (37, 46) - - ± (52)	
	360(30.13×)			- ± +	- - - (62) - ± + (67) - ± + (72)	
	540(30.18×)			- ± +	- - + (1) - - ± (10) - - + (20)	
	300(30.10×)			- - ±	- - ± (1) - - - (109, 460)	

先天梅毒2例は、抗療性と思われるものであるが、これに対して900万ないし930万単位注射後無治療のまゝで経過観察すると、症

例74では550日後にほとんど陰性化を示し、症例75では106日後に陰性化し、290日まで陰性を示している。(第8表参照)

第 8 表 先 天 梅 毒

症例 番号	総量(用法) ×は回数	ペ療法迄 の療法	併用療法	血 清 反 応		
				注射前	注 射	後
74	120(30.4×)	C. 2.78 M. 0.66	C. 0.36 M. 0.72	+++	+++ (1)	
	810(30.17×)			+++	+++ (6) ± +++ (150) + ++ (360) - ± - (550)	
75	600(30.20×)	M. 0.835	M. 0.135	- ++	- - ± (1) - - - (34, 69, 96)	
	300(30.10×)				- - - (106, 135, 165, 230, 290)	

小括)以上各期梅毒に対してペ.を使用し、その血清反応の消長を検討したのであるが、ペ.は第1期梅毒に対しては、決定的な卓効を示し、20ないし60日後に陰性化した。第2期顕症梅毒にては23ないし46日後に著明なる減退を認めた。第2期潜伏梅毒において10例中7例までが陰転、減弱を示したが、第3期潜伏梅毒、護膜腫、前立腺梅毒、脊髄癆等の晩期梅毒の血清反応に対しては、ペ.の効果はあまり期待し得ない。しかし第3期潜伏梅毒及び梅毒性脊髄炎、先天梅毒の中でいわゆる抗療性梅毒に対してもある程度みるべき効果が認められた。

第2項 用量と血清反応の関係

ペ.が血清反応を陰性化せしめ、あるいは減退せしめるに最も効果的な使用総量を検討して見ると第9表A、Bの如くである。B表においては、便宜上500万単位以下と540万単位より600万単位、610万単位より1200万単位、1200万単位以上の4つに大別し、陰転例と減弱例を加えて有効例とし、各期梅毒を第2期梅毒までを早期とし、第3期潜伏梅毒

第9表 用量と血清反応の関係

A

用 量		血清反応		
		陰転例	減弱例	不変例
240万単位以下	3	0	1	2
250万～300万単位	9	2	2	5
310万～500万単位	3	1	0	2
540万～600万単位	33	11	12	10
610万～750万単位	8	1	3	4
760万～900万単位	4	2	0	2
910万～1200万単位	5	0	3	2
1200万単位以上	10	5	2	3
計 75 例		22	23	30

B

症 期	用 量	500万単位以下		540万～600万単位		610万～1200万単位		1200万単位以上	
		有効例	不変例	有効例	不変例	有効例	不変例	有効例	不変例
早 期		3	1	10	2	4	1	2	0
晩 期		3	8	13	8	5	7	5	3

毒以後を晩期と大別して考察した。

全症例について見ると240万単位以下では梅毒の時期に拘らず効果はなく、わずかに3.33%の有効率しかなく、540万単位より600万単位では69.7%の有効率を示している。大別して見ると500万単位以下では40%、540万単位より600万単位では69.7%、600万単位以上59.2%の有効率となり、総量600万単位が最も有効である。梅毒の症期について考えると、早期梅毒においては500万単位以下でも75%の有効率があるが、晩期梅毒では、27.2%でほとんど効果は望めない。540万単位より600万単位では早期梅毒には83.3%の有効率を示し、晩期梅毒においても61.9%の有効率を認める、さらに使用総量を増加しても早期、晩期梅毒ともにいずれも大差なく、610万単位より1200万単位まで増量しても早期では80%とわずかに減少し、晩期においても41.6%と減少、さらに晩期において1200万単位以上使用しても62.5%とわずかに有効率上昇するのみである。

以上の結果からみて、早期、晩期を問わずに540万単位より600万単位が最も効果的な使用総量であろうと思われる。

第3項 使用法と血清反応の関係

第2項において、ペ.の最も効果的な使用総量を検討したのであるが、この総量をいかなる方法で使用するのが最も卓効を得られるか検討してみる。B表においては、前項と同じく有効、あるいは早期、晩期と分類した。

(第10表A, B参照)

A表に見られる如く、各種の使用法を行つてみたのであるが、30万単位1日1回法にては50%の有効率を示し、60万単位1日1回法においては有効率86.6%が得られ、60万単位1日2回分注法では50%である。これを早期梅毒と晩期梅毒について比較検討してみると、B表の如く、早期梅毒においては、30万単位1日1回法では有効率66.6%、60万単位1日1回法は100%、60万単位1日2回分注法では85.7%で、どの方法にてもかなりの効果が得られるが、晩期梅毒においては、

第10表 使用法と血清反応の関係

A		血清反応		
使用法		陰転例	減弱例	不変例
30万単位1日1回法	26	6	7	13
30万単位1日2回分注法	2	1	0	1
30万単位1日5回分注法	2	2	0	0
30万単位1日6回分注法	1	0	1	0
40万単位1日1回法	2	0	1	1
40万単位1日4回分注法	1	0	1	0
60万単位1日1回法	15	10	3	2
60万単位1日2回分注法	22	2	9	11
60万単位1日4回分注法	2	1	1	0
150万単位1日1回法	2	0	0	2
計75例		22	23	30

B		30万単位 1回法		60万単位 1回法		60万単位 2回分注法	
症期	使用法	効果		効果		効果	
		有効例	不変例	有効例	不変例	有効例	不変例
早期		4	2	7	0	6	1
晩期		9	11	6	2	5	10

30万単位1日1回法にては有効率45%、60万単位1日2回分注法では33.3%と極めて悪く、これに反し60万単位1日1回法にては75%の有効率を得られる。

以上の結果よりみて、各期梅毒に対してペ.は60万単位1日1回法が最も効果的な使用法であると考えられる。

第4項 副作用

ペ.はその毒性が極めて低いことが特徴の1つであつて、わたくしの実験成績においても全症例を通じて治療続行に支障を来たようなものはなかつた。副作用について詳しく観察すると、体重の減少はかなりみられたが、これについては項を改めて論ずることとし、本項においては一般的な副作用について述べる。

全症例中副作用とみるべき症状を呈したものは13例である。一般に梅毒に対するペ.の副作用として主に論ぜられるのは発熱であるが、わたくしの実験例においては発熱を来したものは3例、すなわち4%であり、1例は30万単位注射後38°Cの発熱2日間持続

した。1例は90万単位後に38°Cの発熱を来たしたが、翌日下熱した。また1例においては、療法中引続き37.2°~37.4°Cの微熱を認め、療法終了と同時に平熱となった。ペニシリン疹を示した1例は480万単位注射時に腰部、臀部、胸部、背部に掻痒感を伴った紅斑及び丘疹を発生、一過性のもので翌日の注射には支障を来たさなかつた。頭痛を来たしたものの1例で、9回目の注射、すなわち270万単位注射後1時間で前頭部に頭痛を認め、2時間後消褪した。頭重感を来たしたものの2例、中1例は210万単位注射後20分に訴え30分で消褪。1例は90万単位、120万単位注射時に30分後に訴え、20分間で消褪した。これらはいずれも前頭部に頭重感を訴えた。胃重感1例で60万単位注射後30分に認め、3時間持続した。腰痛1例は60万単位注射時30分後に注射部位とは反対側に3時間持続した。また1例においては、120万単位、210万単位注射時20分後に上膊、下肢に牽引痛を訴え、3時間後に消褪した。また1例では90万単位注射後30分に心悸亢進、不安感を訴えたが、一過性で20分後に消褪した。その外食思不振を訴えたものの2例であった。いずれも副作用は、療法中、早期の注射時に発生するものが多かつた。

第5章 全身状態に及ぼす影響

わたくしは、梅毒皮疹、血清反応に対してその優秀性を論じ、その副作用の僅少なことを述べたが、副作用として認められなくても、全身状態になんらかの影響を及ぼすであらうと推定し、つぎの如く分類して、これらについて検討して見た。

- (1) 体重との関係
- (2) 尿性及び尿量との関係
- (3) ペ。治療期間中の肝機能について
- (4) その他全身に及ぼす影響

第1項 体重との関係

ペニシリンはスピロヘータに対し速かにその効力を発現するのであるから、スピロヘータの減弱に伴い、患者の栄養状態とみなされ

る体重になんらかの影響を及ぼすであらうとの推定下に、同一条件で、療法前と、療法終了後に体重測定を行い、この関係を検討した。表中括弧内は増減体重平均値(kg)である。

第11表 体重との関係

A			
症 期 \ 体 重		增 加 例	減 少 例
第 1 期 梅 毒	5	0	5 (0.91)
第 2 期頭症梅毒	3	1 (3.2)	2 (1.25)
第 2 期潜伏梅毒	7	1 (0.5)	6 (1.34)
第 3 期潜伏梅毒	26	4 (1.77)	21 (1.48)
護 謨 腫	2	0	2 (1.95)
前 立 腺 梅 毒	1	1 (0.2)	0
脊 髓 癆	2	0	2 (0.9)
計 46 例		7 (1.41)	38 (1.31)

B						
症 期	第 2 期頭症		第 2 期潜伏		第 3 期潜伏	
	有効例	不変例	有効例	不変例	有効例	不変例
体 重						
減 少	2 (1.25)	0	3 (1.7)	3 (0.98)	12 (1.73)	9 (1.17)
増 加	0	1 (3.2)	1 (0.5)			4 (1.77)

第11表の如く、測定し得た症例46例中、体重減少例38(84.7%)、体重増加例7(15.2%)で、なんら変化のなかつたものが第3期潜伏梅毒に1例あつた。これを各期梅毒に分類すると、減少例は第1期梅毒、護膜腫、脊髄癆は100%、第2期潜伏梅毒85.7%、第3期潜伏梅毒80.8%、第2期頭症梅毒66.6%であるが、これを減少体重平均値より考えると、護膜腫に最も多く減少し、1.95kg、第3期潜伏梅毒1.48kg、第2期潜伏梅毒1.34kg、第2期頭症梅毒1.25kg、第1期梅毒0.91kgの減少を認める。さらにこれを血清反応と比較検討すると、B表の如く有効例に多くの体重減少を認め、不変例においては、体重増加かわずかの体重減少である。すなわち第2期頭症梅毒では、3例中2例は有効例で体重平均1.25kg減少、1例は不変例で3.2kg

増加している。第2期潜伏梅毒7例中4例は有効例で、その中3例は平均1.7kg減少、1例は0.5kg増加、不変例3例は0.98kgの減少を認めた。第3期潜伏梅毒26例中12例は有効例で1.73kg減少、不変例中9例は1.17kg減少、4例は1.77kg増加を認めた。しかしこれら体重減少はなんら治療に支障は来たさなかつた。

第2項 尿性及び尿量との関係

各期梅毒患者にペニシリンを投与した場合、べ。はこれら患者の腎にいかなる影響を及ぼすかを検討せんとし、その一端として、尿性及び尿量を観察した。尿性検査としては、尿中蛋白、糖、ウロビリンをべ。療法前及びべ。療法中、べ療法後と毎日検査した。また尿量測定はできるだけ同一条件下に測定し、べ。療法前5日間の平均1日全尿量をべ。療法前尿量とし、べ。療法中の平均1日全尿量をべ。療法中尿量、べ療法終了後5日間の平均1日全尿量をべ。療法後尿量とした。尿性検査は全症例に行つたが、尿量測定は入院患者にのみ行つたため例数少き憾みがある。

尿性に及ぼす影響はほとんどなく、75例中1例において、治療前蛋白陽性なりしを陰性化せしめ、2例においてウロビリソ陽性を陰性化せしめた。すなわち症例37はべ。療法前に尿中蛋白僅かに認めたが、べ。90万単位注射後は蛋白を証明しなくなつた。症例44は治療前尿中ウロビリソ陽性であつたが、120万単位注射後認められなくなり、症例72は治療前尿中ウロビリソ弱陽性であつたが、60万単位注射後は陰性化した。

つぎに尿量との関係について検査結果を述べる。測定し得たものは23例、すなわち第1期梅毒2、第2期顕症梅毒1、第2期潜伏梅毒3、第3期潜伏梅毒13、護謨腫1、前立腺梅毒1、脊髄癆2例である。これらの治療前尿量、治療後尿量は第12表の如くである。尿量差100cc以上を尿量増加とすれば、べ。療法中尿量増加例は第12表の如く、第2期顕症梅毒1例、第2期潜伏梅毒3例、第3期潜伏梅毒13例中8例に増加を認めた。第2

期、第3期にのみべ。療法中尿量の増加を認めたことは、症例少きため単なる偶然の一致か、あるいはなんらかの要因によつて起るものか注目すべき点であろうと考える。

第12表 尿量との関係

症 期	症例 番号	尿 量 (c. c.)			増 加 例 (平均増加量)
		注射前	注射中	注射後	
第 1 期	2	1255	1268	1165	
	3	867	876	1062	
第2期顕症	8	1700	1943	1820	1 (243)
第2期潜伏	14	2100	2378	2200	
	18	1875	2074	2071	
	22	1645	1836	1850	3 (223)
第3期潜伏	24	1510	1816	1544	
	26	1950	1850	1750	
	27	930	1304	1317	
	34	1616	1540	1600	
	37	981	1332	1390	
	38	1008	1044	1060	
	39	1230	1508	1450	
	45	830	1042	992	
	46	675	787	750	
	47	1550	1460	1410	
	48	1234	1230	1224	
	49	1750	1969	1756	
	57	1574	2150	2105	
護 謨 症	68	2048	2025	2050	
前立腺梅毒	70	1950	1964	1940	
脊 髄 癆	71	1450	1455	1450	
	72	1545	1635	1700	

第3項 べ。治療期間中の肝機能について

梅毒患者においては、特に顕症梅毒より潜伏梅毒においてしばしば潜在性肝機能障害を認め、潜伏梅毒では晩期におい肝機能が障害されることが多いと報告されている⁴⁹⁾⁵⁰⁾。そこでわたくしはこれら梅毒における肝機能障害がべ。療法によつていかに影響されるか、あるいはべ。が肝機能にいかに影響を及ぼすかを検討せんとし、第一製薬製品ヘパトサルフェレンを用いて血中停滯濃度を測定した。この方法をべ。治療前及び治療後に実施し、比較検討した。同時に尿中ウロビリソ反応を

併せ検した。

実験症例は第13表の如く14例、すなわ第1期梅毒2例、第2期顕症梅毒1例、第2期潜伏梅毒2例、第3期潜伏梅毒6例、護謨腫1例、前立腺梅毒1例、脊髄癆1例である。

この検査方法において血中停滯濃度がなん%以上において果して肝機能障害があるかと言う問題は Rosenthal⁴⁵⁾等が pro kilo 2mg のプロムサルファレンを注射し、30分後血中停滯濃度0%を正常値と報告して以来、Machella⁴⁶⁾等は pro kilo 5mg 注射、30分後採血、0%を正常とする考えと Mateer⁴⁷⁾等によつて代表される 5mg 注射、45分後0%を正常値とする考えの2つあるが、わが国においてはヘパトサルファレンを用いて、稲田⁵¹⁾は 5mg 注射、30分後3%を以て正常限界値とし、高橋⁴⁸⁾は 5mg注射、30分後5%、45分後2%を正常限界値としている。わたくしは30分後5%以下、45分後1%以下を正常と考え判定した。

第1期梅毒、第2期顕症梅毒、第2期潜伏梅毒、護謨腫、前立腺梅毒においてはすべて正常であり、ペ。注射によつても肝機能障害

第13表 肝機能との関係

症 期	症例番号	注 射 前		注 射 後		
		H. S. P.	Urob.	H. S. P.	Urob.	
		30分	45分	30分	45分	
第 1 期 梅 毒	2	0%	0%	—	0%	0%
	6	5%	1%	—	1%	0%
第 2 期 顕 症 梅 毒	11	0%	0%	—	0%	0%
第 2 期 潜 伏 梅 毒	18	0%	0%	—	0%	0%
	21	1%	0%	—	0%	0%
第 3 期 潜 伏 梅 毒	27	5%	0%	—	0%	0%
	37	5%	0%	—	0%	0%
	42	5%	0%	—	5%	0%
	43	5%	0%	—	5%	0%
	44	10%	5%	+	5%	0%
	50	5%	0%	—	5%	1%
護 謨 腫	68	5%	1%	—	0%	0%
前 立 腺 梅 毒	70	5%	1%	—	5%	0%
脊 髄 癆	72	10%	5%	±	5%	1%

を惹起することはなかつた。第3期潜伏梅毒においては症例44はペ。療法前に30分後10%、45分後5%、尿中ウロビリソ反応陽性と明らかに肝機能障害を認めたが、ペ。60万単位1日2回分注、総量600万単位注射後には、ヘパトサルファレン検査後30分5%、45分後0%、尿中ウロビリソ陰性となり正常となつた。また症例72の脊髄癆においては治療前には30分後10%、45分後5%、尿中ウロビリソ反応±であつたが、30万単位1日6回分注、総量600万単位注射後には30分後5%、45分後1%、尿中ウロビリソ反応陰性と肝機能の回復を認めた。そのほか第3期潜伏梅毒においてもペ。注射のために肝機能が障害されることは全くなかつた。

第4項 その他全身状態に及ぼす影響

以上梅毒患者に対するペニシリンの影響を各項目にわたり詳述したのであるが、そのほかにペ。療法中各期梅毒患者の全身状態に及ぼした影響について述べる。

症例18(第2期潜伏梅毒)はペ。療法前に、全身倦怠感を訴えていた。この例にペ。1日60万単位1回筋注、総量600万単位使用、ペ。療法中330万単位注射後より全身倦怠感は全く消失し、血清反応も好転した。

症例24(第3期潜伏梅毒)は後頭部の頭痛、耳鳴を訴えていたが、60万単位1日2回分注、1560万単位使用、ペ。療法中300万単位注射後よりこれらの頭痛、耳鳴は完全に消褪し、血清反応も好転、陰性化した。

症例27(第3期潜伏梅毒)は治療前に左側偏頭痛及び左上膊より肩に及ぶ牽引痛を認めたが90万単位注射後偏頭痛は次第に軽快し、330万単位にてほとんど消失、630万単位で完全に偏頭痛及び牽引痛は消褪した。

症例37(第3期潜伏梅毒)は膀胱無力症を合併し、自然排尿なく、残尿200ccを認めたが240万単位注射後自然排尿を認め、残尿も115ccと減少、300万単位注射後は残尿僅か10ccとなり、480万単位にて完全に残尿は消失、排尿正常となつた。

症例55(第3期潜伏梅毒)は初診時視力減

退を認め、視力は右 0.1, 左 0.9であつたが、ペニシリン 600 万単位注射後は右 0.8, 左 0.9 と回復した。

症例 69 (護膜腫) は治療前に全身倦怠感及び食思不振を訴えていたが、ペ. 640 万単位注射後は、血清反応には変化は見られなかつたが、これらの症状は完全に消褪し、食慾正常となつた。

症例 70 (前立腺梅毒) 300 万単位にて尿線相当太く、進出力著明に力強くなり、排尿痛消失し、排尿円滑となつた。600 万単位後は尿線、排尿共に正常となり、1380 万単位終了時には直陽診で前立腺正常となるを認めたが、血清反応には変化はなかつた。

以上の如く梅毒に起因すると思われる全身症状にはすべて好転的に作用し、たとえ血清反応には変化なくとも、患者の苦痛を速かに消失せしめ得た。

第 6 章 総括及び考按

Mahoney, Arnold¹⁾が 1943 年 10 月、暗視野陽性の早期梅毒にペニシリン 1 回 2 万 5 千単位、4 時間間隔で 48 回、総量 120 万単位注射し、その駆梅効果を發表して以来、各国においてその治験成績が報告されているが、いまだなお釈然とせざる点が多々存在する。そこでわたくしは第 2 章に詳述した各期梅毒 75 例に対し、ペニシリン療法を施行、ペニシリンが、いかに各期梅毒の経過に対して影響するかを、第 3 章より第 5 章まで各項目にわたり系統的に検討したのである。

まず皮疹に対する影響を考えるに、これまでの報告で見ると、北村、谷奥、渡辺¹⁴⁾の成績ではスピロヘータの消失は 5 ないし 15 時間、平均 10 時間、硬下疳の上皮形成は 6 ないし 12 日、平均 9 日、硬結の消失は 9 ないし 21 日、平均 15 日、薔薇疹は 3 日にて消褪すると述べ、赤坂¹⁵⁾は初期硬結の完全吸収には 16 ないし 18 日を要し、薔薇疹は 4 日前後、丘疹は 7 日、扁平コンジロームは平均 12 日でそれぞれ消褪すると報告、北村(憲)¹⁶⁾は硬性下疳は 3 ないし 7 日で消失、第 2 期梅毒

疹は 3 ないし 15 日で消褪すると述べている。北村(包)¹⁷⁾は 1 日 1 回 45 万単位、総量 315 万単位使用して、硬性下疳は 5.3 ないし 6.3 日で乾燥、硬結は 16.3 ないし 17.7 日で吸収、1 日 60 万単位、600 万単位使用して薔薇疹、丘疹は 3.0 ないし 7.3 日で消褪したと報告、大村¹⁸⁾は 1 日 1 回 600 万単位使用例においてスピロヘータは 6 時間で証明できなくなつたと發表している。わたくしの実験においては、スピロヘータの消失には 2 ないし 3 日、平均 2.1 日を要し、蚕蝕性硬性下疳の壊死性組織が剥離するに 2 ないし 3 日、平均 2.3 日、潰瘍面の肉芽良好となるに 2 ないし 6 日、平均 3.6 日、潰瘍治癒に 6 ないし 13 日、平均 9.3 日、硬結消失に 9 ないし 23 日、平均 14 日であつた。第 2 期顕症梅毒においては、薔薇疹は 3 ないし 4 日、平均 3.3 日で消褪し、丘疹は 5 ないし 10 日、平均 7.2 日で吸収された。護膜腫においても 6 ないし 10 日にて卓効を認めた。成績結果より考察するに、これら皮疹に及ぼす影響に関しては、ペニシリンの使用量にのみ関係すると思われる。すなわち 1 日の使用量の多少によつて消褪日数に長短の差があると思われる。梅毒の各症期に係せずほぼ同時日にこれらおのおのの皮疹を吸収消褪せしめ得る。

血清反応に対して、文献的にこれを散見するに Plotke¹⁰⁾は 103 例の早期梅毒患者中 91 例 (80%) の陰転例を認め、Castello¹¹⁾ は早期梅毒に対し、ペニシリンと蒼鉛剤の併用により 86.2% の陰性化を認めている。また Chargin¹²⁾等は第 1 期梅毒に対しては 100 ないし 92%、第 2 期 75% の治癒率を挙げている。これに反し O'Leary のごときは晩期潜伏梅毒に対してはペニシリンは血清反応陰性化を望めないと報告し、さらには Thomas²⁰⁾、Aufrance²¹⁾、Johnes²²⁾等は 120 万単位より 240 万単位 1 回注射の大量間歇療法においても早期梅毒には効果的であるが、晩期梅毒に対しては多く期待出来ないと述べている。わが国においても樋口²³⁾は、血清陰性第 1 期梅毒では 92.9%、血清陽性第 1 期梅毒 91.7%、第

2期顕症梅毒 84.6%, 早期潜伏梅毒 71.4%, 晩期潜伏梅毒 18.5%の陰性率を報告、大森²⁴⁾は第1期梅毒 33例中 32例, 第2期梅毒 56例中 35例の陰性化を挙げ、晩期梅毒にはペニシリンの効果は期待し得ないと発表している。北村(憲)¹⁶⁾は血清陰性第1期梅毒 90.9%, 血清陽性第1期梅毒 85.7%, 第2期顕症梅毒 87.5%, 早期潜伏梅毒 69.6%, 晩期潜伏梅毒 32.8%陰性化したと述べている。わたくしの実験例においても、75例中陰転例 22, 減弱例 23, 不変例 30であつた。これを各症期別に考察すると、第1期梅毒に対しては決定的な卓効を示し、有効率 100%であり、第2期顕症梅毒においては 75%, 第2期潜伏梅毒では 70%, 第3期潜伏梅毒 50%の有効率を示し、護謨腫、前立腺梅毒、脊髓癆は血清反応に関してはあまり多くの期待は持てなかつた。がしかし第3期潜伏梅毒、梅毒性脊髓炎及び先天梅毒の中で、いわゆる抗療性梅毒に対してある程度みるべき効果が認められた。

さらにこれらの卓効を挙げ得るに最も効果的な用量について検討した。これを文献的考察を行うとペニシリンの使用量は Mahoney¹⁴⁾が当初用いた 120 万単位から第1次共同発表では、240 万、第2次発表では 360 万、さらに 480 万から 600 万単位と次第に増量の傾向をたどつている。すなわち樋口²³⁾、北村¹⁶⁾は 480 万単位より 600 万単位が最も効果的な量であると述べ、Thomas²⁶⁾は 450 万ないし 900 万単位が最優秀であると報告し、Curtis²⁵⁾は早期梅毒に 480 万ないし 600 万単位にて 90% 治癒せしめ得るとしている。わたくしはこれを自験例より検討して見ると第4章第2項に述べた如く、240 万単位では 33.3%の有効率しかなく、これを 500 万単位以下、540 万ないし 600 万単位、610 万ないし 1200 万単位、1200 万単位以上と大別して考察すると、早期梅毒においてはいずれの量にても効果はあるが、晩期梅毒においては、500 万単位以下では 27.2%しか有効率なく、540 万ないし 600 万単位使用すれば 61.9%の有効率を認め、

これを増量して 610 万ないし 1200 万単位用いても有効率 41.6%と減少し、1200 万単位以上で 62.5%とわずかに上昇するのみである。要するに早期、晩期を問わず、最も効果的な使用量は 540 万単位より 600 万単位であると断定する。

次に使用法について最近 Thomas²⁶⁾等は早期梅毒に対しては油性ペニシリン 30 万ないし 60 万単位を毎日 15 日間連続投与を最も効果ありとし、Heller²⁷⁾は 30 万単位 1 日 2 回法と 60 万単位 1 日 1 回法では効果の相違は大してないと言つている。Schaffer²⁸⁾あるいは Heymann²⁹⁾は油ペG 60 万単位 1 週 2 回の投与にて連日注射と大差ない効果を挙げたと述べ、Sobel³⁰⁾等は油臘ペ 30 万単位 16 日間、総量 480 万単位使用法と 30 万単位 1 週 2 回、総量 480 万単位使用法と比較し、第1期梅毒では効果は相等しく、第2期梅毒では連日注射が有効であると報告している。

これを要するに梅毒に対しては、ペニシリンの血中有効濃度を常に保つことが治療の規準となつており、Rosahn³¹⁾、Schwemlein³²⁾等の動物実験、或は臨床的にも明らかにされているが、Cohn³⁴⁾等は必ずしも血中濃度を常に有効に保つ必要はないと述べているが、わたくしの実験例から言つても血中有効濃度の峯を高度に保つことが効果的であると考え。すなわち 60 万単位 1 日 1 回法が最もよく 86.6%の有効率を示している。これを早期、晩期とに分けて考えると早期梅毒においては 60 万単位 1 日 1 回法では 100%有効であり、晩期では 75%の有効率を示している。これに反し 30 万単位 1 日 1 回法は早期梅毒では 66.6%, 晩期梅毒では 45%, 60 万単位 1 日 2 回分注法では早期梅毒 85.7%, 晩期梅毒 33.3%の有効率しか得られなかつた。

以上により 60 万単位 1 日 1 回法にて、総量 540 万単位より 600 万単位使用するのが最も効果的であると思われる。

ペニシリンによる駆梅毒療法に副作用の少いと言うことは諸家の一致した見解である。すなわち重篤な副作用は極めて稀であるがその

反面とくに心臓血管系梅毒における危険性はペニシリン療法の当初より問題視されている。

Farmer³⁶⁾は41%にヘルクスハイマー現象として発熱を認め、発熱の頻度、強さは第1期梅毒と第2期梅毒とでは差はなかつたと述べ、Pardo³⁶⁾は48.5%に本現象を報告している。Scott³⁷⁾は晩期梅毒において重篤なヘルクスハイマー現象を呈し死亡した例を発表しているが、しかしCurtis³⁸⁾は心臓血管系梅毒に最初から大量のペニシリンを使用してさしつかえないと述べ、わが国においても北村(憲)³⁶⁾は10%に軽度のヘルクスハイマー現象を認めたが、治療に支障はなかつたと述べ、赤坂³⁶⁾は300万単位1撃法において69.2%の発熱を認めたが、治療続行できたと報告し、北村(包)³⁷⁾も心臓血管系梅毒におけるヘルクスハイマー現象の危険性は杞憂にすぎなくなつたと述べている。わたくしの実験例において副作用を示したものは13例で、この中発熱を来したもののわずかに3例で全症例の4%である。2例はペ。療法当初に一過性に38°Cの発熱を、1例はペ。療法中37.2°より37.4°Cの微熱を認めたが、治療続行にはならさしつかえなかつた。その外にペニシリン疹を示したもの1例、頭痛或は頭重感を訴えたもの3例、胃重感、腰痛、牽引痛、心悸亢進及び不安感を認めたもの各1例、食思不振を示したもの1例を認めたが治療にはさしつかえなかつた。また頭痛、頭重感はいずれも前頭部に訴えた。これらの副作用はペ。療法の初期に認められることが多い。このようにペ。療法の副作用は極めて軽微であるから、ペニシリンの晩期梅毒に対する使用も一層活潑になることと思われる。

副作用としては以上の如く極めて軽微であつても、全身状態にはなんらかの影響を及ぼすであろうと思考し、第5章に述べた如く、各項目にわたり検討してみた。ペニシリン注射のために体重はかなり減少し、実験例46例中84.7%において平均1.31kgの減少例を認め、体重の増加したものは15.2%であつ

た。これを各症例期により考えると護謨腫においては1.95kgと最も多く減少し、ついで第3期潜伏梅毒1.48kg、第2期潜伏梅毒1.34kg、第2期顕症梅毒1.25kg、第1期梅毒0.91kg減少し、またこれを血清反応の消長より考えると、体重減少例は有効例に多く認められ、不変例では体重増加か或は僅かの体重減少であつた。すなわちこれはスピロヘータの体内生存日数により左右され、有効に作用したペニシリンによつてスピロヘータの急激な減弱による体細胞の不平衡に係るものと思われる。しかしこれら体重減少は治療になんら支障を来さなかつた。

腎に対しては障害を及ぼすことなく、全症例において尿中蛋白、糖、ウロビリンの発現は認めず、かえつて尿中蛋白、ウロビリン陽性の例においてこれを消失せしめ得た。すなわち腎に対しても良好なる影響を及ぼすものと思われる。またペニシリン療法中に第2期顕症梅毒、第2期潜伏梅毒、第3期潜伏梅毒にのみ治療中に治療前尿量より平均223ccないし303ccの尿量増加を認めた。これは例数少きため偶然の一致であるか、あるいは腎実質における極く軽度の梅毒性変化の消褪等のなんらかの要因による一過性の多尿であるか注目すべき点であろうと思われる。

さらにわたくしは肝機能について検討すべく第一製薬製品ヘパトサルフェレンを用いて、治療前と治療後に測定し、早期梅毒には肝機能障害なきことを知り、同時にペニシリンによつて晩期梅毒における潜在性肝機能障害をも消褪せしめ得ることを認め、ペニシリン注射のために肝機能障害を惹起されることはないと思われる。

その外梅毒に起因すると思われる全身倦怠感、食思不振、後頭部頭痛、耳鳴、偏頭痛、視力減退、牽引痛、排尿障碍等にすべて良好に作用し、たとえ血清反応には変化なくとも患者の苦痛を速かに消失せしめ得るものと考ええる。

第7章 結 論

梅毒の経過においてペニシリンがいかなる影響を及ぼすかを検討せんとして、各期梅毒患者75例（第1期梅毒9、第2期顕症梅毒4、第2期潜伏梅毒10、第3期潜伏梅毒44、護謨腫2、前立腺梅毒1、脊髓癆2、梅毒性脊髓炎1、先天梅毒2）にペニシリン療法を施行し、種々の方向よりこれを観察してつぎの結論に達した。

1) スピロヘータの消失には2ないし3日、平均2.1日、壊死性組織の剝離は2ないし3日、平均2.3日、肉芽良好となるには2ないし6日、平均3.6日、潰瘍縮小に4ないし8日、平均5.6日、潰瘍治癒に6ないし13日、平均9.3日、硬結消失に9ないし23日、平均14日を要する。蕁麻疹は3ないし4日、平均3.3日、丘疹は5ないし10日、平均7.2日にて消褪する。護謨腫においても6ないし10日にて卓効を認めた。

2) 皮疹の消褪は1日のペ、使用量によつて消褪日数に長短の差があると思われる。

3) 血清反応の消長を各期梅毒について検討したが、第1期梅毒に対しては決定的な卓効を示し、第2期顕症梅毒、第2期潜伏梅毒においても14例中10例が陰転、減退を示したが、第3期潜伏梅毒、護謨腫、前立腺梅毒、脊髓癆等の晩期梅毒に対して効果は余り期待出来ない。

4) 第3期潜伏梅毒、梅毒性脊髓炎及び先天梅毒の中でいわゆる抗療性梅毒に対し効果

を期待し得る。

5) 早期、晩期を問わず540万より600万単位が最も効果的な使用総量である。

6) 各期梅毒に対しペニシリンは60万単位1日1回連続法が最も効果的な使用法である。

7) 副作用を示したものは75例中13例で、発熱3、ペニシリン疹1、頭痛1、頭重感2、胃重感1、腰痛1、牽引痛1、心悸亢進及び不安感1、食思不振2でいずれも軽微である。

8) 副作用はペ、療法当初に発現する事が多い。

9) ペ、療法中に84.7%が体重減少を来たし、晩期梅毒に多量に減少する。すなわち護謨腫1.95kg、第3期潜伏梅毒1.48kg、第2期潜伏梅毒1.34kg、第2期顕症梅毒1.25kg、第1期梅毒0.91kgの減少を認める。また体重減少例は血清反応有効例に多く認められる。

10) 尿中蛋白、糖、ウロビリンの発現は認めない。

11) 第2期顕症梅毒、第2期潜伏梅毒、第3期潜伏梅毒においてのみ尿量増加を認める。

12) 梅毒による潜在性肝機能障害を消褪せしめ得る。

13) ペ、によつて肝機能障害を惹起することはない。

14) その外梅毒に起因する全身症状にはすべて好転的に作用する。

摺筆するにあたり終始御懇篤な御指導と御校閲を賜つた恩師根岸教授に衷心から感謝の誠を捧げます。

参 考 文 献

- 1) Machoney J. Vene. Dis. Inform., 30, 350, 1949.
- 2) 樋口 臨牀. 第3巻, 第10号, 6頁, 昭和25.
- 3) 川村: 体性. 第33巻, 第1号, 2頁, 昭和23.
- 4) 重松: 皮膚科紀要. 第47巻, 第2号, 103頁.
- 5) 並木, 竹内: 性病. 第37巻, 第5号, 208頁, 昭和27.
- 6) 並木: 皮膚と泌尿. 第15巻, 第3号, 215頁, 昭和28.
- 7) 並木: 皮性誌. 第63巻, 第2号, 99頁, 昭和28.

- 8) Wright. Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., 34, 425, 1950.
- 9) Plotke. J. Vene. Dis. Inform., 30, 69, 1949.
- 10) Plotke. Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., 34, 161, 1950.
- 11) Castello: Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., 34, 431, 1950.
- 12) Chargin. Arch. Dermat. and Syph., 59, 595, 1949.

- 13) Chargin Arch. Dermat. and Syph., **63**, 104, 1951.
- 14) 北村, 谷奥, 渡辺 : 性病. 第**36**卷, 第5号, 123頁, 昭和26.
- 15) 赤坂 : 性病. 第**38**卷, 第1号, 24頁, 昭和28.
- 16) 北村(豊) : 皮膚と泌尿. 第**14**卷, 第2号, 154頁, 昭和27.
- 17) 北村(豊) : 臨牀皮尿誌. 第**6**卷, 第12号, 609頁, 昭和27.
- 18) 大村 : 皮膚と泌尿. 第**15**卷, 第3号, 294頁, 昭和28.
- 19) Thomas : Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **33**, 6, 1949.
- 20) Thomas : Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **34**, 331, 1950.
- 22) Johnes Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **36**, 250, 1952.
- 23) 樋口 皮性誌. 第**63**卷, 第4号, 211頁, 昭和28.
- 24) 大森 : 臨牀皮尿誌. 第**6**卷, 第12号, 619頁, 昭和27.
- 25) Curtis J. A. M. A., **145**, 1223, 1951.
- 26) Thomas J. Vene. Dis. Inform., **28**, 19, 1947.
- 27) Heller J. Vene. Dis. Inform., **28**, 11, 1947.
- 28) Schaffer Arch. Dermat. and Syph., **59**, 599, 1949.
- 29) Heymann Arch. Dermat. and Syph., **58**, 34, 1948.
- 30) Sobel J. Invest. Dermat., **15**, 13, 1950.
- 31) Rosahn : Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **34**, 2, 1950.
- 32) Schwemlein : J. A. M. A., **137**, 1948.
- 33) Schwemlein J. Vene. Dis. Inform., **31**, 155, 1950.
- 34) Cohn : Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **33**, 27, 1949.
- 35) Farmer : J. A. M. A., **138**, 480, 1948.
- 36) Pardo Am. J. Syph. Gono. and Vene. Dis., **33**, 225, 1949.
- 37) Scott J. A. M. A., **139**, 217, 1949.
- 38) 竹内 臨牀皮尿誌. **6**卷, 12号, 613頁, 昭和27.
- 39) 樋口 : 性病. **36**卷, 4号, 89頁, 昭和26.
- 40) 樋口 : 性病. **37**卷, 1号, 21頁, 昭和27.
- 41) 加納 : 性病. **37**卷, 1号, 6頁, 昭和27.
- 42) 樋口 : 性病. **37**卷, 5号, 230頁, 昭和27.
- 43) 三浦 : 性病. **37**卷, 5号, 232頁, 昭和27.
- 44) 外松 : 京都府立医誌. **49**卷, 3号, 237頁, 昭和26.
- 45) Rosenthal-White : J. amer. med. Assoc., **84**, 1112, 1925.
- 46) Machella Am. J. med. Sci., **213**, 81, 1947.
- 47) Mateer J. amer. med. Assoc., **133**, 909, 1947.
- 48) 高橋 : 綜合医学. **7**卷, 4号, 180頁, 昭和25.
- 49) 古賀 : 皮膚と泌尿. **3**卷, 5号, 527頁, 昭和10.
- 50) 中村 : 皮尿誌. **43**卷, 281頁, 昭和13.
- 51) 稲田 : 綜合医学. **8**卷, 914頁, 昭和26.

THE CLINICAL AND EXPERIMENTAL STUDY ON THE COURSE OF SYPHILIS WITH PENICILLIN

PART I

• THE CLINICAL STUDY ON EACH STADIUM OF SYPHILIS WITH PENICILLIN TREATMENT

YUJI MORIOKA

The Dermato-Urological Department, Medical Faculty,
Okayama University, Okayama
(Director: Prof. H. Negishi)

In order to investigate the effects of penicillin treatment in the course of syphilis, I have made observations on them from various standpoints in 75 cases of syphilis of every stadium, and obtained the following results:

1) By taking the average, *spirochaeta pallida* disappeared in 2.1 days, took 3.6 days for the granulation tissue to become fresh, 9.3 days to cure the chancre and 14 days for the induration to disappear. Moreover, roseola disappeared in 9.3 days, papule in 7.2 days and in 6 to 10 days it showed an excellent effect on gumma.

2) The time needed for the disappearance of eruption depended on the amount of penicillin injected daily.

3) By examining the transition of the serum reaction in each stadium of syphilis, penicillin showed an excellent effect on primary syphilis, and both in recent and latent secondary syphilis 10 cases of 14 turned negative or diminished in degrees, but in the late syphilis the effect of penicillin was not reliable.

4) Penicillin was also effective on the so called anti therapeutic syphilis in latent tertiary syphilis, syphilitic myelitis and congenital syphilis.

5) 5,400,000 to 6,000,000 units of penicillin as a total was the most effective quantity for penicillin treatment.

6) Injecting 600,000 units of penicillin at once every day was the most effective application.

7) 13 cases out of 75 showed slight reaction due to the penicillin injection.

8) These reactions tended to appear at the initial stage of penicillin treatment.

9) 84.7% of the patients lost more or less weight during the treatment, especially the late syphilis cases, who lost more weight, and also, they were be found more frequently in the cases which showed improvement in the serum reaction.

10) Albumin, glycosuria and urobilin did not appear in the urine during the treatment.

11) The increase of the daily urine quantity was found in the recent and latent secondary syphilis and the latent tertiary syphilis.

12) Penicillin improved the occult insufficiency of the liver function caused by syphilis.

13) No cases showed insufficiency of the liver function due to the penicillin treatment.

14) The general symptom caused by syphilis took a favourable turn with penicillin treatment.